

人文会ニュース

1990. 9

- 丸善・人文会合同研修会報告
.....調査・研修委員会 1
- 丸善・人文会合同研修会に参加して
.....丸善書店 高橋健一郎 3
井波麻由子
西川 仁
- 〔人文書講座21〕
天皇制の神話崩し.....赤坂憲雄 8
- アメリカの出版流通.....豊田恭子 20
- 新しい「読書ガイダンス」の試み
.....東京大学出版会 山下 正 26
- 仁と元——転換の時代に、本を読む.....安江良介 29

歴史学研究会●編集

日本同時代史

【全5巻】刊行開始！ 各●¥2200

待望の本格的・総合的な戦後通史。

- 1 敗戦と占領
- 2 占領政策の転換と講和
- 3 五五年体制と安保闘争
- 4 高度成長の時代
- 5 転換期の世界と日本

東京神田 青木書店 292-0481
神保町 | 価格税別

有斐閣 出版案内
(定価は税込み)
東京都千代田区神田神保町2-17

●歴史にみる日本人と技術「全6巻完結」 技術の社会史

【編集】三浦圭一・佐々木潤之
一内田星美・山崎俊雄

原始・古代から現代までの民衆の生活と労働の中に「技術とその社会的展開」を探り、技術と人間とのかわりを追究。

〔6〕技術革新と現代社会

山崎俊雄編

戦後日本の技術革新とその問題性を、農業技術・総合石油化学・都市建設技術・情報技術について解明する。定価二四〇〇円
(1)古代・中世の技術と社会 (2)在来技術の発展と近世社会
(3)西欧技術の移入と明治社会 (4)重工業化の展開と矛盾
(5)工業社会への変貌と技術 四六判上製 定価平均二〇〇〇円
別巻 データ・ガイドブック 付・総索引

大月書店

英伸三フोट・ドキュメント 一所懸命の時代

一九六〇～七〇年代、高度成長期の変貌する日本と日本人の原風景。280×220mm・75000円(税込)

南と北の知られざる素顔。A5判・15500円(税込)

ソウルと平壤 萩原遼著

写真が捉えた隣国の心。A5判・予16000円(税込)

韓国真情吐露 桑原史成著

東京文京本郷2-11-9／電話03(813)4651

直木孝次郎著

飛鳥

その光と影

万葉の古里、飛鳥は、古代国家建設の雄音と絶えない抗争の嘆きの声が交錯する、歴史の舞台である。本書は、悠久の星霜にみがかれて人々を魅了してやまない歴史の舞台を、古代史の碩学が縦横に活写した決定版。四六判・三六頁／定価一八六〇円

典昭和戦前期の日本

伊藤隆監修
百瀬 孝著

戦前期日本の統治組織・議会制度・法制・軍事・行政機構などの実態を分りやすく体系的に記述し、当時の政治・社会を理解する上での基礎知識を提供。菊判・四四頁
定価五八〇〇円

吉川弘文館

定価は
税込

113東京都文京区本郷7-2-8・電話03-813-9151

丸善・人文会合同研修会報告

調査・研修委員会

本年六月二十一日・二十二日の二日間にわたって丸善と合同研修会を実施いたしました。当研修会は人文会が全国二八〇書店のご協力により運用しております「特約店制度」の主要な活動であり今回で七回目となります。

丸善全国一八店舗から三一名、オブザーバー出席の取次店鈴木書店から三名、人文会二一名と計五五名の参加となり、箱根湯本駅から会場の強羅まで貸切大型バスで移動という今までで最大規模のものとなりました。また参加されました丸善全国一八店舗からは人文書担当者のみならず各ジャンル担当者が参加されたこと、経験二〜三年の担当者を中心に中堅者から店長までの現場の方々とさらに「店舗事業部」「和書センター」のスタッフの方々と幅広い参加者が、規模に加えもうひとつの特徴であったと云えます。

研修会の前に参加者がPRを兼ねた自己紹介を紙面をもつて交換し、さらに会員社には研修までに丸善各店舗を訪問し事前準備するという形ですすめました。

初日は丸善・都野弘商品本部部長から店舗展開の基本構想についての説明と、会活動説明の後に版元サイドから他店と日本橋店・アークヒルズ店・東急文化村店の比較説明を行いました。

二日目は初日の全般に関する内容とは一転して日常業務を中心に文科会討論と「日刊まるすニュース」編集者、鈴木書店井狩春男氏に講演を依頼いたしました。

以下にこの概要をまとめ報告いたします。

丸善都野商品本部部長は先に交換した版元PRから人文書の息の長さに驚嘆されながら店舗構想について次の説明

をなされました。

基本テーマ「書籍で稼げる店づくり」をかけた積極的に店舗展開を推進する条件として人材の育成とレベルアップが急務であることを強調され、丸善総売上額一〇五三億円（九〇年三月）にしめる書籍のシェアアップに強い意欲をしめされました。

人文書担当者以外の参加者が多いこともあり、販売企画委員会・弘報委員会・調査研修委員会・特約店委員会の各委員長から活動内容について説明しつつ一層の理解と協力をお願いしました。

版元からの報告・店舗比較において、総合店として機能する日本橋店、立地条件に即した専門店の色濃いアークヒルズ店・東急文化村店について、従来の概念に固定しない棚づくりと販売方法が必要であること、立地に即した品揃えの充実が店舗の活性化に不可欠であることが報告された。

説明・報告が主であった初日と異なり、二日目は分科会討論を一グループ一〇名〜一二名の編成で五グループで行いました。

版元からの情報提供、新刊配本システム、常備、フェア、売上げスリッパの分析の活用など日常業務についてそれぞれ

れの立場から基本的な考え方を説明し理解を深めた分科会であったといえます。

「ベストセラーの方程式」と題した井狩春男氏の講演は、今までのベストセラーをユニークな切り口で分析し、人をひきつける本とは何かをテーマに販売する側からも作る側からも大いに参考となる方程式を展開されました。

今回二日間の研修会をとおし積極的に店舗展開をはかる丸善のパワーと熱意が参加者の皆様から伝わり大きな期待を抱かずにはおられませんでした。限られた時間内で問題点の整理、確認に留まった感もありますが書店・版元間の意志疎通が重要であることを改めて痛感した次第です。

最後になりましたが、ご多忙のところわざわざ箱根までおかけつけ下さいました向裕司取締役店舗本部長・丸善の窓口としてご尽力いただきました依田進書籍グループ長・山尾義豊商品本部部長・丸田耕三商品本部係長はじめ強行日程にもかかわらず積極的に参加下さいました丸善の皆様をオブザーバー参加の鈴木書店の皆様に改めてお礼申し上げ報告とさせていただきます。

（法政大学出版局 市川昭夫）

丸善・人文会合同研修会に参加して

丸善株式会社店舗事業部営業企画室

高橋健一郎

私は当社が発行するカード会員のための情報誌、『MA CLUB』（エムエイクラブ）の編集を担当している。

この年数回発行されるB5変形サイズ、二四頁の小冊子の目玉は、毎号のテーマにそって著名人に執筆頂いている巻頭エッセイである。第一号が発行されたのは昭和五九年の六月であったが、この時のテーマは「私と本の付き合いかった」であった。そしてこの記念すべき第一号の巻頭を飾ったのが当時一大ブームを巻き起こしたニューアカデミズムの旗手、浅田彰氏だった。ほんの数百字の原稿を取るために、当時超売れっ子になろうとしていた氏とやっこのことでコンタクトをとり、原稿を宿泊先のホテルまで取りに行くなど、いろいろと苦労したことを覚えている。

今までにこの『MA CLUB』の巻頭エッセイに寄稿頂いた執筆者のお名前を思いつくままにあげてみると、浅田彰、中沢新一、吉本隆明、如月小春、中野収、山口昌男、新井満、丸山健二、吉永みち子、吉田ルイ子、安西水丸、筑紫哲也、北方謙三……、芥川賞、直木賞作家を始めとしてそうそうたるメンバーがいる。その中でも、各号のエッセイにおいてキーパーソンとも言える方々が、人文社会書の著者の方々であったことに気づく。『MA CLUB』は「限られた誌面の中でも、どこか時代の流れを感じさせるような、とんがった部分を持つ」ということを目指しており、私も、特に「人文社会系の棚」ということを意識していた訳ではなかったが、以前から毎号のテーマや執

筆者のヒントを得るために、いつのまにか人文社会書のコーナーに通っていたので、こうした傾向がでたのも、当然といえば当然のことであった。

このように、少なからず関心を持っていた、人文社会書の版元の皆さんに直接お会いして、お話が伺えるということで、今回の会議を大変楽しみにしていた反面、フーコー、ドゥルーズ・ガタリ、デリダ……などという、話題が飛び交ってしまったら、どうしようかと内心いささか緊張気味であった。しかし、当社側から参加させて頂いた者が、私を含めて必ずしも人文社会の棚の専門家ではなかったため、会議の内容が専門的すぎないようにご配慮頂いたせいか、あまり細かい専門的な議題は出なかったようだ。一方で、

文化村内の書店ということで、美術・音楽・映画・演劇といった芸術書全般の和洋書を担当している私にとって、これまでは人文書として特に扱っている意識はあまりなく、

基本的なことながら、多くの示唆に富んだお話を伺うことができた。特に、晶文社の萬洲さんの「棚に情報がある」というお話や、未来社の西谷さんの「書齋型の棚」といったお話には、非常に共感を覚えた。そして、なによりも感銘を受けたのは、会議の運営を通して感じられた人文会の皆さんの、出版人としての情熱であり、志であり、真摯な姿勢であった。

最後に、このように大変有意義な会議に参加させて頂く機会を与えて下さった人文会の皆様に感謝いたしますとともに、今後とも貴会と末永くお付き合いさせて頂くことを願ってお礼とさせて頂きます。ありがとうございます。

丸善渋谷文化村店
井波麻由子

芸術書関連の本として知らず知らずのうちに接していることが多かった。従って今回の研修においても適切な意見や感想を言うことができず人文会の方々には申し訳なく思っ

ている。しかし、私自身にとっては、人文書を例に書店としての「本を見せる」「棚をつくる」ことの必要性を実感でき、非常に勉強になった。

版元と読者をつなぐ媒体として存在するのが書店であるが、私たち書店が持つ役割には、タイムリーに売れる本を置き、品切をおこさせないことや、よい本を置くことがあると思う。そしてさらにもう一つ、売れないよい本をいかに売るかという役割も重要である。そのためには本の見せ方・棚のつくり方が問題となってくるのではないだろうか。本の持つそのものの魅力だけではなく、プラスアルファの付加価値をひき出したり、つけ加えたりして、見せて売ることが大切になってくると思う。研修会でも話題にのぼったが、従来の棚づくりではなく、わかる人が見ればわかるような、新しい本との出会いもある棚づくりの必要性和魅力を感じた。

ただこのことは、追求しすぎると見にくい棚（最終的には書店）になっていくように思う。いろいろな操作がおこなわれすぎた棚はその思惑が読者に伝わってはじめてよい棚だと評価され、新しい本との出会いや発見が生まれてくるのではないだろうか。一部の人々にとってはよい棚、おもしろい棚、何か発見がある棚であっても、目的の本を探

しにきた人、棚全体ではなく本だけを見る人、従来通りの棚に慣れている人（本を購入するにも人には様々な目的や考え方や必要性があるのだから）にとっては、そういった見せ方も、難解な棚・探しにくい棚とうつることもあるのではないだろうかという心配もある。

一方で、作務的な棚を見せ、自分が売りたい本を売っていく楽しさを持ちながら、もう一方では、多くの人が求めやすい・探しやすい棚を展開する、といったバランスのとれた書店が私にとっての理想の書店である。全ての人々に働きかける力を持った棚づくりはできないであろうが、見やすく、それでいて隅の方で新しい発見や遊び心が感じられるような、好奇心をそそる書店づくりを私は現在の店で目指して行きたいと思う。幸運なことに現在私が働く店は外見が従来の書店のイメージとは違い、映画のシーンにも登場しそうな洒落た造りである。外見にひかれて入ってくれた方でも、見せている棚の内容に興味を持ってもらえるような店づくりをぜひしていきたい。

最後になったが、今回不勉強ながら研修に参加させていただき、いろいろ教えていただいた人文会のみなさまに心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

去る六月二一日、二二日の両日、丸善と人文会の合同研修会が行われ、二年目社員の私も大阪松坂屋店から参加しました。

洋書・外売中心の丸善から、和書を主とした「書籍で稼げる店づくり」への転換を図るなか、全国の実務者が一同に会し、人文会と合同で研修会を行うことは、初めての試みだったのです。

今回、参加するにあたって相当な緊張感を伴いましたが、何よりも一月から和書（ビジネス書・人文書）を担当したばかりの私が、人文書の方々の話をよく理解することができると、という強い不安を持っておりました。しかし、そのことは杞憂に終わりました。

初日の各版元、各氏の報告、二日目のグループ討論会、井狩氏の講演会等、人文書販売の助けとなる、大変興味深いものだったからです。夜の懇親会もリラックスした楽しいものでした。全て、店頭で得るものとは違った貴重なも

のになったのです。

各氏の報告のなかで、特に興味深く思われたのは、筑摩書房の菊池氏が話された「リプロの池袋、渋谷両店は、一方は棚差しで、また一方は面陳列で、有効な本のみせ方、売り方をし、そのことが集客にも繋がっている」という指摘と、未来社の西谷氏の人文書の棚構成「書齋型」と「図書館型」についての指摘でした。西谷氏の編集者としての人文書販売に対する数々の指摘は、人文書販売の楽しさを誘うものでした。

グループ討論会では、和やかな雰囲気の中、活発な意見の交換がなされました。

なかでも、版元へのスリップ送付の重要性と、今の書評に対する見方等は、すぐにでも生かせるものでした。

「まるすニュース」の井狩氏の講演会「ベストセラーの方程式」は一時間半があつという間に過ぎたのです。

以上のように、このたびの合同研修会は、聞くことすべ

法政大学出版局

〈表示価格は税込みです〉

● M. アンリ ● 野蠻

科学主義の独裁がいかに文化の破壊をもたらしたか——現代の新たな野蠻を告発する哲学的文明批判。山形・望月訳／2678円

● G. ヴィーコ ● ヴィーコ自叙伝

自らの生活と思想形成の道程を主著『新科学』公刊に至るまで率直に語る挑戦的自伝。参考論文を付す。福籙忠恕訳／4326円

● E. モラン ● 出来事と危機の社会学

社会学批判から巨細な主題を展開する現在形の社会学。西欧文化論に及ぶ著者の多次元的思考を集成。浜名・福井訳／4944円

● A. カペルラヌス ● 宮廷風恋愛の技術

12世紀フランスの宮廷付礼拝堂司祭による中世の恋のハウツー。西欧文学の理解に必須の原資料。本邦初訳。野島秀勝訳／2884円

● J. ボードリヤール ● 宿命の戦略

独創的概念を駆使して「悪の原理」を追求。現代社会の体験を客体による宿命の戦略として捉え直す。竹原あき子訳／2472円

● A. シモン ● 記号と夢想

悲劇—祝祭—演劇への展開と結節点を、先哲の理論を辿り、多様な体験・調査から追究する現代祝祭論。岩瀬孝監修／3914円

● P. ツヴァイク ● 冒険の文学

オデュッセウスからマルローまで、冒険者たちの世界とその変貌を辿って、冒険の本質と可能性を探る。中村保男訳／2472円

102 東京都千代田区富士見2-17
☎03-237-1731 振替東京6-95814

てが興味深いもので、大阪から参加した甲斐のある、実りの多いものでした。

店舗での書籍販売の熱意も新たに湧いてくるというものです。しかし、同時に、限られた時間・人数で、研修会から持ち帰ったものを棚作りに生かしていくことの難しさも感じています。

日常業務をこなしていくことは、もちろんのことですが、ただこなすだけでなく、ボルヘスの「理想の図書館」では

ありませんが、「理想の本屋」とは何かを常に念頭に置いて（あまり大きなことを書くとは、全然実行できていない自分が嫌になるのですが）工夫するための時間をできるだけ多く作り、棚作りに生かしていきたいと思っています。

最後になりましたが、人文会の更なる発展と、合同研修会の二回目、三回目の実現を願ひまして、おわりに致します。

天皇制の神話崩し

〈1〉

天皇制はほんとうに多くの神話に包まれている。『古事記』や『日本書記』にみえるような、古代の神話群をさしているわけではない。天皇制が更新されてゆくとき、そこにはつねに新たな神話が生成を遂げ、困難な道行きの露払いをしてゆく。神話は過去ではない、ほかならぬ現在を舞台として、ある見えにくい呪力をおびつつ、わたしたちの天皇制を眺める眼差しそのものをやわらかく緊縛しているのだ。

たとえば、大嘗祭をおこなわなかった天皇は「半帝」とよばれていた、と歴史家は語ってきた。それは、だからこそ天皇が天皇になるためには大嘗祭は不可欠なのだ、大嘗

祭をつうじて天皇は天皇になるのだ、という議論の重要な証拠とみなされてきたのである。「半帝」神話とよぶことにしよう。

赤坂憲雄

ところが、この「半帝」神話が実は、戦後になって強調されだした、文字通りに神話に過ぎなかったことが、最近明らかにされている。「半帝」の史料は、南北朝時代の『帝王編年記』にみえるわずか一例だけであり、そこで「半帝」とよばれているのは、大嘗祭のみならず即位すらできなかった仲恭「天皇」である。仲恭は四歳で即位したが、承久の変のために即位式も大嘗祭もあげられずに、わずか七十日で退位している。幕末までは廃帝として歴代天皇のなかにも数えられていなかった、この仲恭ただ一人が、「半帝」とよばれたのである。

あきらかに、大嘗祭をおこなわなかった天皇が「半帝」とよばれたというのは、戦後生まれの、あるいは戦後育ちの神話にすぎなかったのだ。おもえば、中世の半ばから近世にかけて、二百二十年間にわたって大嘗祭は廃絶されていたが、その間の大嘗祭をおこなわなかった天皇が「半帝」とよばれた形跡はない。ほんの少しの労を惜しまなければ、すぐに明らかになるはずのことが、歴史家たちをもまきこんで神話として流通させられていたわけだ。

さて、天皇をめぐる神話は、いまなお生成と消滅をくりかえしつつ、天皇制の現在をささえているのだということを知覚しておきたい。ここでは、そうした天皇制をめぐる神話群のなかから、いくつかのテーマにしばって考えてみることにしよう。

〈2〉

王が何と呼ばれるか、つまり王の称号は、その王権がいかなる性質の王権であるかを天の下に公に物語るものだ。たとえば、天皇という称号は、世界にたったひとつの王の冠である。だからこそ、天皇が天皇という称号を身にまといて登場するとき、それはたいいてい、天皇は世界に比べるも

のなきたったひとつの固有の王権であるという、いわばイデオロギーを背に負っていた。

天皇号の成立は、古代律令制の誕生した七世紀末であったといわれる。日本という国号と不可分一体につくられたともいう。東アジア文化圏のいずれの、日出づる国の王が、圧倒的に強大な中国の皇帝にたいして肩をならべる、独自の王権であることを主張しようとするとき、天皇という称号と日本という国号が案出されたのだ。

しかし、そのときはいまだ、天皇はテンノウではなく、スメラミコトと読まれていたはずだ。天皇がテンノウになるのは、それから半世紀あまり降って、八世紀も後半のことだ。編纂時の『日本書紀』本文にはなかった、「武烈天皇」「継体天皇」といった漢風諡号が、そのとき付加されたのである。律令制以前の天皇はオホキミ（大王）やスメラミコトであり、テンノウ（天皇）ではなかった。いわば、律令制の以前／以後における巨大な裂け目＝非連続が、天皇という称号をかぶせることによって埋められ、はるかな原始・古代からの連続の神話（↓万世一系神話）をささえる、重要な根拠の一端をになうことになったのである。

死後の諡につけられた「○○天皇」が、それから一貫して見出されるかというと、実はそうではない。十世紀の半

ばには、「○○院」という諡号に変わり、いくつかの例外を除けば、十八世紀の末にいたるまで「○○天皇」は使用されなかったのだ。

それでは、歴史のなかの天皇はいかなる名称によってよばれていたのか。皇帝・聖上・至尊・御門・帝・内裏・禁裏・天子……など、実にさまざまな呼称があった。そうした呼称の並存は、天皇が近世以前にはとうてい一義的な像を結びえぬ、さまざまな貌をもつ存在であったことを暗示しているはずだ。むろん、天皇という呼称もみられはするが、すくなくともそれは特権的なものとして位置づけられていたわけではない。

天皇が特権的な呼称として位置づけなおされるのは、明治維新であったのだ。外交場面では、幕末までは大君が使用されていた。それが明治初年に一時的に、天皇になり、諸外国の拒絶にあつて皇帝に統一されるようになるのが、一八七二（明治五）年のことだ。国内向けの称号としては、逆に、大日本帝国憲法の作成過程にはじめ皇帝であつたものが、結局は天皇に統一されることになった。国外向けには皇帝、国内向けには天皇という称号に落ち着いたのである。

この国内／国外の称号における、天皇／皇帝の使い分け

は、軍部ファシズム下の昭和十年代を例外として、いまにいたるまで踏襲されている。はつきりしているのは、天皇という称号が特権的な位置を占めるようになったのは、たかだか明治以降の作為にすぎないということだ。にもかかわらず、それは強固に神話化されており、わたしたちは天皇という称号の自明性から容易に抜け出すことができない。

〈3〉

すでに、わたしたちの時代にあつて、天皇という制度の歴史的なアイデンティティの大半は壊れている。あるいは、制度としての天皇制がさらに小さくなってゆくなかで、最後まで天皇制のアイデンティティの核として残るのは、ほかならぬ天皇という呼称であるのかもしれない。天皇制のアイデンティティ＝連続性は、いったいどこに存在するのか。そこにまつわりつく神話群に、光を射しかけてみよう。歴史のなかの天皇は、なによりマツリゴトにしたがう祭祀者の貌を一義にしてきたと、とりあえずはいえるはずだ。宗教としての天皇制こそが、天皇制の歴史的アイデンティティの核にあつたものだ。しかし、それは不親政が天皇制の本質である、といった議論とは似て非なるものである。

天皇は古代律令制の成立期、後醍醐の建武新政、明治維新と、すくなくとも三度はみずから政治的権力の掌握者として振る舞った。ほかの時期にも、親政への志向は捨てられていないし、短期間ならば院政期の天皇のなかに親政をとった天皇が何人も含まれていた。むしろ、院政という政治形態は、位を退いた天皇が法皇・上皇として専制的な権力を行使する制度であったことをおもえば、天皇家Ⅱ皇室が不親政を、いわば政治的権力から一定の距離をとることを信条なり、本質なりにしてきたなどとは、まるでいえない。

それにしても、天皇が祭祀王としての貌を、どれほど衰退していた時期にも手放さなかったことは否定できない。しかも、祭祀王としての天皇のおびる宗教的権威は、それぞれの時代の支配勢力に支配の正統性をあたえる権威の源泉であった。天皇はたしかにマツリゴトにしたがう祭祀者であったが、つねに国家支配を呪術・宗教的に保証することをもっとも重要な役割としてきたのだ。その意味では、天皇は歴史上、例外なしに支配共同体の一員としての座を離れることはなかったといつてよい。天皇は不親政を本質としてきたといった議論が、いかに部分的な知にとどまるか、あきらかに窺えるはずだ。

それゆえ、そうした天皇不親政論に乗っかりながら、現在の象徴天皇制こそが天皇制の本来の形であるとする、近年台頭してきた保守派の天皇制観もまた、根底から批判されなければならないだろう。それは、歴史上のいくつかの親政の時期を例外としてカッコにくくったうえで、古代以来、戦後の象徴天皇制までをつらぬく天皇制の歴史的アイデンティティとして、不親政を位置づけようとするものだ。個としての、または役割としての天皇に、直接的な権力が帰属していないという、消極的な意味合いでの共通性はたしかに見出される。しかし、天皇をめぐる権威／権力の分掌体制は、とても不親政といったチームでひとつくりにできるものではない。そこには、不親政なるチームから逸脱する、さまざまな歴史の変遷がみられるということだ。

鎌倉幕府の成立以前には、天皇がたとえ不親政であるとしても、天皇に全国的な統治権が帰属することは、自明の前提であった。摂政や院は、統治権を天皇から「委任」される代行者にすぎなかったのだ。鎌倉・室町の武家政権は、征夷大將軍の任命をつうじて、すくなくとも形式的には天皇から統治権を「委任」されたが、戦国期にいたれば、群雄割拠する諸大名はもはや幕府の「委任」、ましてや朝廷の「委任」を受けて分国を支配したのでない。

徳川家康はたしかに征夷大將軍に任じられはしたが、たんに武家の棟梁としての地位の形式的な承認にすぎず、天皇・朝廷にいくらかであれ統治権があることを意味したわけではない。近世の半ば頃から、しだいに頭をもたげてくる、徳川家は天皇の「委任」を受けて全国統治にあたっているのだといった、いわゆる委任論など、家康の時代には考えられないことだった。この程度の歴史をさらってみただけでも、不親政を天皇制のアイデンティティの核とみなす方法の危うさは、ただちに了解されるはずだ。

あるいは、意識すると否にかかわらず、象徴天皇制の現在を追認する形で登場してきた、空虚の中心・ゼロ記号・中空構造・歌舞伎の座頭といったメタファーによって、天皇制を規定する方法の限界を指摘するべきだろう。これらはひとまとめにして、天皇不親政論のヴァリエーションとして位置づけることが可能だ。限界はあまりに明白である。天皇をめぐる制度の歴史は、とてもそうした、単純なメタファーによって覆いきれない、ということだ。そして、決定的なのは、この種の議論からは、あらわれとして空虚の中心やゼロ記号にみえようとも、天皇が依然として、それぞれの時代の政治権力に支配の正統性をあたえる宗教的権威の源泉として、支配共同体の一員であり続けて

いることが、見落とされているのだ。

〈4〉

いずれであれ、くりかえすが、天皇が祭祀者としての貌を、たとえばもつとも衰退していた戦国期から近世にかけての時期にも手放さなかったことだけは、たしからしく思われる。その祭祀王としての天皇がおびていたのは、それぞれの時代の政治権力に支配の正統性をあたえる宗教的権威であった。常民大衆に天皇の直接的な権威が及んでいただけではないし、常民大衆が天皇を生き神として信仰していたわけでもない。民衆と天皇制といったテーマが好んで語られるが、明治以後についてはいざ知らず、近世以前の民衆にとって天皇がかぎりなく遠い存在であったことは、記憶されていたほうがよい。

民衆と天皇制をめぐる、いくつかの神話が存在する。たとえば、一木一草にも天皇制が宿っているといった、草の根天皇制論を思い浮かべている。ほんとうに、わたしたちの文化や習俗や信仰の小さな襞深くにまで、天皇は、天皇制は浸透しているのだろうか。もし、そうだとしたら、わたしたちはけっして内在的に天皇制を相対化し無化する契

機を見出しえないことになる。一木一草にも宿るという天皇制にたいして、自己を切り苛むような戦いを、いわば不断的の自己否定として続けなければならないだろう。

それが、戦前の民衆がなすすべもなく、天皇を担ぎあげる軍部の独走を許し、むしろ積極的な加担者でしかありえなかったことにたいする、深い反省に発するものであることは了解できる。しかし、その反省が中途半端になされるとき、逆に状況認識を誤らせることにはならないか。民衆の内なる天皇制は、はたしてどの程度に深いのか。

ひとつは、天皇信仰について。

天皇を生き神や現人神として、絶対帰依の対象にするような常民レヴェルの信仰が一般化したのは、いつか。むろん、それを準備する前史があったことは疑いないが、直接的には、近代以降の民衆教化の結果である。全国におよぶ巡幸や、教育勅語や御真影の配布などをつうじて、天皇制は草の根レヴェルにまで降ろされていったのである。民俗学的な研究は、しばしばその前史を過剰に取りあげがちだが、周到な腑分けによって連続／非連続の諸相を明らかにする作業こそが、不可欠だろう。

たしかに、常民社会には生き神信仰があつて、豊臣秀吉や徳川家康を生き神として祀ったり、処刑された一揆の指

導者を神として崇めたりすることが、すでに近世の初期にはみられた。天皇を生き神とする動きも、たとえば、十九世紀の前半に、京都の民衆が「死にたる天神より、生きた天神様（ミカド）を祈るべし」と、御所に千度参りをした記録が残っている。しかし、そうした天皇信仰は京都・畿内周辺にかぎられ、神祇信仰としてもあくまで非特権的なものだった。列島のおちらこちらには、天皇や都のことなどまるで無関心で、天皇信仰などとは無縁に生き死にを重ねていた常民大衆がいたはずだ。

近世の民衆は、知識としてならば、漠然と天皇の存在を知っていたかもしれない。けれども、その宗教世界は、たとえば『遠野物語』のように、天皇や記紀の神々といった村落レヴェルを超越したカミを必要とせぬ、自己完結性を有していたのではないか。仮に、そこに天皇や皇子・姫を主人公とした貴種流離譚があったとしても、それがただちに、民衆と天皇との深い結び付きを示唆しているわけではない。それが、さまざまな異人や神々の来訪譚のヴァリエーションのひとつにすぎない可能性を、考慮する必要がある。ふたつめに、祖先祭祀との関係について。

いくつかの動きがあつた。幕末から開始されていた、歴代天皇陵の復興と整備の作業。また、明治初年における、

皇靈（天皇や皇室の祖先の靈の総称）のための皇室祭祀の、系統的なおびただしい数の登場。ともに、天皇家の万世一系神話、つまり、血の力リスマ神話の、一方は可視的な、他方は儀礼的な再認と更新を目的としたものであったといえるはずだ。

そこに、民俗レヴェルの祖先祭祀との関連をみる理解がある。天皇家の皇靈の祀りが、常民の祖霊信仰と形式をひとしくする、いわば連続する、ということだ。しかし、これは明らかに、近代天皇制のイデオロギー的な作為の所産とみなされるべきものだ。祭祀における共通性から、民衆と天皇制との関係を類推してゆく方法には、やはり限界があることを指摘しておきたい。

〈5〉

いわゆる伝統にまつわる数多くの神話は、現在においてなお、たえず再生産されているのだということに注目したい。昭和天皇の葬儀に際して、ひとりの考古学者がこんなふうに新聞に書いていた。大葬の行列は、古文獻で学んだ古代の葬列を彷彿とさせ、皇室の強い伝統を感じさせるものであった——と。皇室の葬儀の伝統とは、いったい何だ

ろう。ここにも天皇制の現在をめぐる神話が、貌を覗かせている。

古代律令制の時期からすでに、天皇家の葬儀は神仏混交的なもので、僧侶の主導のもとにおこなわれていた。そこに大きな改編の手が加えられるのは、明治天皇の葬儀に際してのことだ。幕末の孝明天皇の葬儀は、天皇家の菩提寺である泉涌寺において、神仏混交でおこなわれている。明治天皇のときに、すべての儀礼が仏教色を排してまったくの神式となるが、孝明以前の葬儀は神仏混交のために前例とならず、実質的には、そのほとんどが古代の文獻をよりどころにしての、新たな発明であったという。当然ながら、大正・昭和の両天皇の場合も同様である。

先の考古学者は、実はそうした皇室の葬儀の歴史をよく承知しているのだ。にもかかわらず、この考古学者は、明治天皇のときに復活した「古来の葬制」のなかには、悠遠にして重厚な歴史があり、それは日本人固有の葬制が結晶されたものだ、と語るのだ。いくつかの倒錯が含まれている気がする。

たかだか百年前に、古代の文獻をもとにして再構成された近代の皇室の葬儀が、どうして悠遠にして重厚な伝統といたったものになるのだろうか。日本人固有の葬列の結晶と

いうが、近代になって作爲された皇室の葬儀に対する評価としては、いささか大仰ではないか。皇室の葬儀の伝統をいうならば、奈良時代から近世末期にいたる千数百年間の仏教式の葬儀の、まぎれもない伝統こそが語られなければならないはずだ。ところが、僧侶の主導した千数百年の時間の無化のうえに、新たに創出された葬儀のうえに、悠遠なる伝統をみる。ある種の倒錯というほかはない。伝統という名の神話は、過去ではない、現在進行形に生み出されているのだ。

〈6〉

天皇の即位儀礼に関しても、伝統という名の神話のウェールを幾枚も剥がしたうえでなければ、その現実の姿を眼の当たりにすることはできないだろう。ことに、大嘗祭の場合には、「秘儀」ゆえになおさら困難がつきまとうことになる。

天皇の即位儀礼は、踐祚（神器Ⅱ劍璽渡御の儀）、即位礼（高御座にのぼり、即位を天神地祇に奉告し、天下に告げ知らせる儀式）、そして、大嘗祭から成る。かつて近世までは、大嘗祭そのものは神道的なものだが、唐風・密教・

陰陽道・道教などの諸儀礼が組み合わされることで、即位儀礼の全体は神仏習合的な儀式として構成されていた、という。それが大きく再編成され、唐風・密教・陰陽道などの要素を排除した純神道的なものになるのは、やはり明治維新のときのことである。ここにも巨大な裂け目Ⅱ非連続が横たわっていることは、疑いない。

即位儀礼をめぐる最近の研究から、いくつかの画期をなす時代の即位儀礼の変遷に眼をこらしてみよう。

院制期には、即位礼に密教的な即位灌頂が加えられている。天皇が即位式に際して、高御座のうえで、摂関に伝授された印明の知識をもって、秘印をむすびダキニ天の真言を唱える儀式である。印は四海領掌印といい、列島をとりまく海域内を天皇が統治する正統性を象徴するもので、真言は天皇の大日如来との性的結合による一体化・変身をおらわすものであるらしい。

中世の半ばには、新嘗その他の宮廷儀式とともに、大嘗祭が廃絶されている。大嘗祭には二百一十年間におよぶ空白がある。他方で、密教的な即位礼は遅れがちなが、戦国期にも継続されている。それゆえ、この段階には天皇が天皇になるために、大嘗祭を必要としない時期があり、密教的な即位灌頂の実修を付加した即位礼によって、天皇と

しての資格が獲得された、とみる理解もあらわれている。

二世紀あまりの空白を経て、近年の半ば近くになって、大嘗祭は復興された。その背景には、天皇・朝廷側と将軍・幕府側とのあいだの複雑な駆け引きがあり、ことに一七三八（元文三）年の再興は将軍吉宗の積極的な働きかけによるものであった、といわれる。再興にあたっては、祭儀の有職が研究され、膨大な古い文獻・記録が参照されたが、祭儀の核をなすはずの天皇自身の祭祀は、摂関家の口伝にもとづく「秘儀」ゆえに、戦国期の途絶以前の内容がよく伝えられ、再現されたかは、疑問視されるところだ。

明治の再編は、天皇の即位儀礼の伝統を根底から改編するような、大掛かりなものであった。孝明天皇のときまでおこなわれていた即位灌頂は廃止され、ほかにも唐制の礼服・香木進献の儀なども姿を消し、唐風・密教・陰陽道的な要素が排されることで、即位式は神道風に変更された。大嘗祭もまた、京都から東京に舞台を移して、日本の全国土を支配する権威・権力の祭祀へと拡大された。即位儀礼の全体のなかで、純神道的な性格を強めた大嘗祭は、あらためて天皇制をささえる儀礼体系の中核として位置づけなおされた、とかがえられる。

こうして天皇の即位儀礼に加えられた改変の痕を辿って

みると、たとえば、大嘗祭は神代以来の変わらぬ伝統に根ざした祭祀であるといった理解が、歴史のなかの現実よりも、あるイデオロギー的な理念にこそささえられていることが、あきらかに見えてくるだろう。さらに、天皇制をめぐる神話をひとつひとつ、丹念に検証する作業が求められているにちがいない。

それにしても、昭和天皇の死と葬儀から新天皇の即位と大嘗祭へと、おそらくは天皇制の「秘密」が顕わされつつ隠され、隠されつつ顕わされる、ある特権的な時間を、わたしたちが生きてあることは疑いない。神話崩しの眼差しを鍛えながら、「秘密」のいくらかなりと見届けることにしようか。

「天皇制の歴史と現在」に関する本

（１）王権と天皇制のあいだ

フレイザー『王権の呪術的起源』（折島正司・黒瀬恭子訳）

思案社

W・ウィルフォード『道化と笏杖』（高山宏訳） 晶文社

A・M・ホカート『王権』（橋本和也訳） 人文書院

E・バンヴェニスト『インドヨーロッパ諸制度語彙集Ⅱ

王権・法・宗教』(蔵持不三也ほか訳) 言叢社

P・クラストル『国家に抗する社会』(渡辺公三訳) 書肆

風の薔薇

山口昌男『天皇制の文化人類学』立風書房

佐々木宏幹『憑霊とシャーマン』東京大学出版会

上野千鶴子・網野善彦・宮田登『日本王権論』春秋社

中沢新一『悪党的思考』平凡社

丸山静『熊野考』せりか書房

赤坂憲雄『王と天皇』筑摩書房

(2) 歴史のなかの天皇制

西郷信綱『古事記研究』未来社

益田勝実『火山列島の思想』筑摩書房

岡田精司『古代王権の祭祀と神話』塙書房

松前健『古代伝承と宮廷祭祀』塙書房

井上光貞『日本古代の王権と祭祀』東京大学出版会

石母田正『日本古代国家論』(第一部・第二部) 岩波書店

神野清一『律令国家と贱民』吉川弘文館

河内祥輔『古代政治史における天皇制の論理』吉川弘文館

五味文彦『院政期社会の研究』山川出版社

黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』岩波書店

佐藤進一『日本の中世国家』岩波書店

網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店

網野善彦『異形の王権』平凡社

丹生谷哲一『検非違使』平凡社

今谷明『室町の王権』中央公論社

飛鳥井雅通『明治大帝』筑摩書房

小西豊治『もう一つの天皇制構想』御茶の水書房

遠山茂樹編『天皇と華族』岩波書店

朝尾直弘編『日本の社会史・第三卷 権威と支配』岩波書

店

*

*

丸山真男『現代政治の思想と行動』未来社

藤田省三『天皇制国家の支配原理』未来社

橋川文三『日本浪漫派批判序説』未来社

神島二郎『近代日本の精神構造』岩波書店

色川大吉『ある昭和史』中央公論社

三島由紀夫『文化防衛論』新潮社

松浦玲『日本人にとって天皇とは何であったか』辺境社

赤松啓介『天皇制起源神話の研究』明石書店

*

*

久野収・神島二郎編『天皇制論集』三一書房

久野収・神島二郎編『天皇制論集 第二輯』三一書房

菅孝行編『叢論・日本天皇制Ⅰ』柘植書房

菅孝行編『叢論・日本天皇制Ⅱ』柘植書房

菅孝行編『叢論・日本天皇制Ⅲ』柘植書房

亜紀書房編集部編『天皇制を考える』亜紀書房

古橋信孝編『天皇制の原像』至文堂

(3) 不親政と象徴天皇制

津田左右吉『日本上代史の研究』岩波書店

和辻哲郎『日本国民統合の象徴』(全集第十卷) 岩波書店

和歌森太郎『天皇制の歴史心理』弘文堂

石井良介『天皇——天皇の生成及び不親政の伝』山川出版

社

洞富雄『天皇不親政の起源』校倉書房

猪瀬直樹『ミカドの肖像』小学館

多木浩二『天皇の肖像』岩波書店

武田清子『天皇観の相剋』岩波書店

坂本孝治郎『象徴天皇がやって来る』平凡社

高橋紘『象徴天皇』岩波書店

中村正則『象徴天皇制への道』岩波書店

家永三郎『戦争責任』岩波書店

粉川哲夫『電子国家と天皇制』河出書房新社

加藤典洋『アメリカの影』河出書房新社

鶴見俊輔・中川六平編『天皇百話』(上の巻・下の巻) 筑

摩書房

赤坂憲雄『象徴天皇という物語』筑摩書房

(4) 宗教としての天皇制

吉本隆明『信の構造3 全天皇制・宗教論集成』春秋社

村上重良『天皇の祭祀』岩波書店

安丸良夫『神々の明治維新』岩波書店

宮田登『生き神信仰』塙書房

宮田登『民俗宗教論の課題』未来社

高取正男『神道の成立』平凡社

福永光司・上田正明・上山春平『道教と古代天皇制』徳間

書店

山折哲雄『死の民俗学』岩波書店

安丸良夫・宮地正人編『宗教と国家』岩波書店

黒田俊雄編『国家と天皇』春秋社

(5) 即位と大嘗祭

折田信夫『古代研究』(全集1、3) 中央公論社

にひなめ研究会編『新嘗の研究』1 学生社

にひなめ研究会編『新嘗の研究』2 学生社

にひなめ研究会編『新嘗の研究』3 学生社

皇学館大学神道研究所編『大嘗祭の研究』皇学館大学出版部

版部

皇学館大学神道研究所編『続大嘗祭の研究』皇学館大学出版部

版部

岡田精司編『大嘗祭と新嘗』学生社

岩井忠熊・岡田精司編『天皇代替り儀式の歴史的展開』柏書房

書房

川出清彦『祭祀概説』学生社

三品彰英『古代祭政と穀霊信仰』平凡社

田中初夫『踐祚大嘗祭』木耳社

真弓忠常『日本古代祭祀の研究』学生社

平野孝国『大嘗祭の構造』ぺりかん社

吉野裕子『大嘗祭』弘文堂

吉本隆明・赤坂憲雄『天皇制の基層』作品社

(6) 文化と天皇制

倉塚暉子『巫女の文化』平凡社

郡司正勝『童子考』白水社

藤井貞和『源氏物語の始原と現在』砂子屋書房

兵藤裕己『王権と物語』青弓社

鳥居明雄『鎮魂の中世』ぺりかん社

森山重雄『近松の天皇劇』三一書房

百川敬仁『物語』としての異界』砂子屋書房

内野光子『短歌と天皇制』風媒社

坂口安吾『日本論』河出書房新社

沖繩タイムス社編『沖繩にとって天皇制とは何か』沖繩タイムス社

イムス社

岡部隆志・斉藤英喜他編『天皇制入門』JICC出版局

赤坂憲雄(あかさか・のりお)

一九五三年生まれ。日本思想史専攻。著書に『異人論序説』(砂子屋書房)、『王と天皇』(筑摩書房)、『境界の発生』(砂子屋書房)、『象徴天皇という物語』(筑摩書房)、『天皇制の基層』(作品社)などがある。

アメリカの出版流通

豊田 恭子

今回は、アメリカの主な出版流通ルートについて。あちこちで読んだり聞いたりしたものを、私なりになんとかまとめたものが次なる図および説明です。不勉強の向きはどうぞご指摘を。

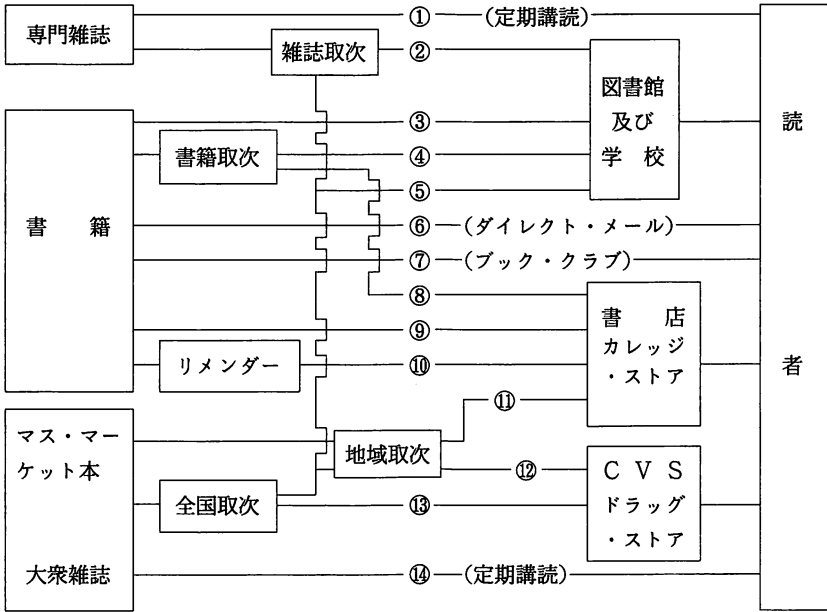
①専門雑誌発行所↓読者

北米ではざっと七万タイトルの雑誌が発行されているといわれるが、一部売りだされるのはそのごく一部で、九割以上が読者への定期購読か図書館を対象とした専門雑誌である。発行所も大学・研究所・その他専門機関・団体が圧倒的多数を占め、一般の書籍出版社とは重複しない場合が多い（だからこそ、前回書いたように、雑誌版元は著作権を主張し、著者が雑誌論文を他の著作に収録したりすることを禁ずるわけだ）。

②専門雑誌発行所↓雑誌取次↓図書館

これら膨大な専門誌を揃えることは図書館の重大な役割の一つだが（大学図書館なら理系で予算の七〇八割、文系でも四〇五割を雑誌購入にあてることが前回書いた）、これを図書館側で管理しようとする努力はとうの昔に放棄され、一九二〇年代から台頭した雑誌取次（サブスクリプト・エージェンシー）の手に全て委ねられているのが現状である。現在はファクソンとエビスコの独占状態。二社とも国内外一萬タイトルを管理しているといわれ、図書館への納入だけでなく、情報提供、予算管理まで行なう。図書館では雑誌に関することなら全てここに問い合せるし、近年のようにドルが下落すると海外雑誌への予算配分調節や、また最近では図書館内の雑誌管理システムも同取次の主導下で行なわれている。

アメリカの主な出版流通ルート



③書籍出版社↓図書館・学校

書籍出版社は全米で二万二五〇〇社、年間発行点数は五万点以上とされる。書店がこれら出版社に直接注文をする(⑩ルート)のを伝統としてきたのに対し、図書館や学校は書籍取次(ホールセラー)を使うのを常としてきた(④ルート)。しかし一般流通ルートにのらない書籍、政府刊行物などは、やはり直接注文にならざるを得ない。大手出版社の買収・合併が続き、今や出版社は九大系列に統合されたといわれる一方で、それへの反発や幻滅感、またパソコンによる出版の簡易化も手伝って、近年は小出版社もまた倍増しており(前述二万余社のうち八〇〇〇社が過去五年以内にできている)、活動も活発になってきている。

④書籍出版社↓書籍取次↓図書館・学校

従来、図書館は単品ごとに注文し受け入れを行なってきたわけだが、出版点数の増加を背景にして、一九五〇年代から取次の見計り配本(アプルーバル・プラン、プランケット・オーダーなどと呼ばれる)を導入し始めている。取次(ホールセラー)と図書館とであらかじめ設定した合意事項(プロファイル)を基に、新刊が自動配本されるシステムで、当初は図書館側の主体性の欠如とか、取次は売れた

い本を選ぶから図書館のニーズと一致しないとか、批判が続出した。しかし何といっても速く確実に新刊が入ること、またプロフィールの細分化や返品受け入れといった条件面の改善が進んだことで、公共図書館をはじめ今や大学図書館にまで普及している（日本のようにマーク付きということはない）。もっともハーバード大学のように、年間一〇万冊を購入しながら、未だなお単品ごとの注文を頑固に堅持している図書館もあるにはあるが。

⑤ マス・マーケット本出版社↓取次↓図書館・学校

公共図書館でマス・マーケット本（書籍出版社の発行するペーパー・バックとは区別され、主に雑誌ルートで扱うもの）を扱う所が増えている。その場合はそれ専門の取次（ディストリビューター）と取り引きする。

⑥ 書籍出版社↓読者

アメリカは広い。日本など（悲しい哉）カリフォルニア一州に軽くおさまってしまうのである。中部や南部では、一番近くのショッピング・センターに行くのに車で一時間、なんてザラにある。そこで勢力を奮うのが、ダイレクト・メールやブック・クラブである。出版社は各種特典やディ

スカウントをうたったダイレクト・メールをうち、豪華本の購入やブック・クラブの入会を誘う。ブック・クラブも最近では多様で、従来からの一般向け小説や児童書に加えて、歴史、科学、法律、美術、健康、園芸など読者の好みに合わせて選択できるようになってきている。

⑧ 書籍出版社↓書籍取次↓書店

取次（ホールセラー）は約五〇〇社、図書館向け二五〇社、書店向け一七〇社（重複あり、『リテラリー・マーケット・プレイス』より）。だが全米をカバーする大手はせいぜい数十社、そしてジャンルも全てカバーする総合大手となれば五、六社というのが私の個人的印象である。注目されるのは、ペーカー&テラー、ブラックウェル・アメリカなど老舗の図書館向け取次が書店との取り引きを開始したことで、情報量や迅速性を売り物に書店へのアピールを強め、取次ルートで一部書籍を調達する書店も徐々に増えている（しかし正味はやはり高くなる）。

⑨ 書籍出版社↓書店

書店は全米で二万四〇〇〇店、うち三分の二にあたる一万六〇〇〇店が独立店、残り八〇〇〇店がチェーン店（本

店一〇〇〇店、支店七〇〇〇店『ライブラリー&ブック・トレード・アルナック』より)。これら全部と個別に口座をもち管理する出版社の方も大変だが、一方書店と取引引きする主要版元五〇〇〇〜一〇〇〇社として、これを個別に管理する書店の方も楽ではない(業界でコンピュータ導入が進んだのが納得できる)。取次条件は正味五〜七掛、精算一〜三カ月後、返品条件あるなしなど、版元によって大幅に違う。一般的に専門書ほど条件がきつく、ベストセラーになれば融通がきく。

⑩書籍出版社↓リメンダー↓書店

五年前に税法が変わり、版元在庫にも税金がかかるようになって以来、版元の在庫処分はますます拍車がかかり、従来五年とされていたのが今や三年、速いと一年で処分にまわされる。ここで登場するのがリメンダーと呼ばれる専門取次(日本の特価本卸業者のようなもの)で、大手は四社(全体では八〇社といわれる)。出版社から処分在庫のタイトルと冊数が記されたカタログがまわると、オークションで独占的に買取り、書店には定価の一〜三割で卸す。書店に行くときと新刊のディスプレイ(ニューヨーク・タイムズのベスト10の本二割引きなど)の他に、既刊本のディスプレイ

カウント・コーナーを設けている場合があるが、前者が版元からの直接大量仕入れによる割引きであるのに対し、後者はリメンダーからの仕入れだと思ってほぼ間違いない。

⑪マス・マーケット本・大衆雑誌↓雑誌取次↓書店

旧来、CVS、ドラッグストア、スーパーなどの専売特許とされていたマス・マーケット本や一般雑誌が、チェーン書店ではほぼどこも、独立店でも今や三分の二までが扱いを開始しているといわれ、書店イコール書籍のみ(雑誌なし)の昔の図式は完全に崩れつつある。雑誌は手間ばかりかかって利が少ない、という昔の通念も、今は雑誌は集客力をあげるだけでなく売上にも貢献する、へととって変わられつつある。

⑫マス本・大衆雑誌↓雑誌取次↓CVSなど

大衆雑誌は、全国取次(ナショナル・ディストリビューター)が独占的に仕入れて地域取次(インデペンデント・ディストリビューター)やチェーン店などに卸す場合と、出版社が複数の全国取次や地域取次に卸す場合とがある。多くの場合、小売り側は何もせず、管理は取次まかせ。一部では返品率五〇%以上になるというウワサもある。

⑭ 大衆雑誌→読者

CVSなどの返品率の高さに泣く版元の善後策は、やはり直接購読である。大衆誌のほとんどが二〇～二五%のディスカウントで定期読者の獲得に熱をあげている。

以上が概略だが、流通は日々ますます複雑化しており、書店専門の雑誌取次が出てきたり、リメンダーが図書館と取り引きを始めたたり、スーパーで辞典が売られたりともはや単純な図式にはとてもおさまりきらない状態になってきている。表を「アメリカの主な出版流通ルート」としたのも、そういう含みからである。

書籍業界で働く個人が集まったノン・プロフィット団体「ブック・インダストリ・スタディ・グループ」の調査によると、八七年度書籍業界総売上二二九億ドルのうち、一般書店で売上は四二億ドル（三三%）、カレッジストア二一億ドル（二六%）、図書館二二億ドル（九%）、学校二九億ドル（一五%）、読者への直接販売二四億ドル（二九%）、輸出九億ドル（七%）、その他二億ドルとなっている。

取扱い高（金額）に対する版元からの直接仕入れと取次経由仕入れとの比率は一般書店で九対一、カレッジストア

八対二、図書館二・五対七・五、学校二対八、全体で八対二となっている（取次は業界全体の扱い高の二割に關与していないということだ）。

最後にもう一つ。アメリカの出版流通を語ろうとするとき、CIP（カタログ・イン・パブリッシング）と呼ばれるシステムの存在を見落としてはならないだろうと私は思う。

CIPを日本ではどう訳しているのか寡聞にして知らないが、合衆国では一九七一年に開始され、後にイギリスでも始まっている。出版社はゲラ刷りの段階で議会図書館（LC）に一部を提出。LCはISBNコード、LC受付け番号、分類番号、件名など一〇〇項目以上にわたる書誌レコードを作成し、それを版元側に返却する。そして版元はそれを扉の裏に印刷して製本し、出版するという手順を踏むのだ。緊急出版の場合など、タイトルと目次ができた段階でLCに提出したりすることもあるときが、基本的にこのプロセスを外すとISBNコードも付されず、よって流通にもならない（出版社が独自にコードを付すことは禁じられている）。逆に流通本であれば、出版した段階で既にLCマークができあがっているわけで、いわゆる市販

マークは存在しない。異なったマーク間での差異も生じない。

現在はパウカー社がISBNコードの統一管理センターとしての役割をLCから委託されており、同社は書名、著者名、版元、価格といった最低限の情報にISBNを加えて新刊情報を書店や図書館に流す（冊子に加えて、今ではCD-ROM版もある）。ここには出版一〜二カ月前のタイトルが網羅されているわけだから、選書ツールとして重要な役割も果たす。これが同社の発行する「パブリッシャーズ・ウィークリー」に反映され、また年度毎の『ブックス・イン・プリント』（書籍総目録）や出版情報を統計にした『ライブラリー&ブック・トレード・アルマナック』（出版年鑑）へと結実することは言をまたない。合理的にできている、と思う。

とはいえ、私はアメリカのシステムを賛美するつもりはない。一つの国には、その国の歴史があり民族があり習慣がある。アメリカのシステムは、アメリカの歴史と民族と習慣の上に創り出されてきたものであり、日本のシステムもまた、そうでしかありえないのだと思う。ただ他国を知ることが、自国を考えることにつながればよいのだと思う。

弘報委員会より

○十月二日より四日間にわたり、第二十一回研修旅行を行います。訪問地は、鳥取・島根・山口。特約店・準特約店さんを中心とした研修会、図書館さんとの懇談会等、ハードスケジュールが予定されております。

次号（来年一月発行予定）において、さまざまな形で、研修旅行の成果をご報告します。

○本年七月に開催されました「東京ブックフェア」の人文部門の特別企画として執筆された安江良介氏の論文を、来場者以外の方々にも、お読みいただきたいと思い本誌に再録いたしました。

○赤坂憲雄氏および安江氏の論文の文献リストを、品揃えやフェアのためにぜひご活用下さい。△読書の秋△は人文書の棚の充実から始まるのです。

○最後になりましたが、お忙しいところ、本号にご執筆下さいました方々に、御礼申し上げます。

新しい「読書ガイドンス」の試み

—90東京ブックフェアにおける人文書コーナー—

東京大学出版会 山下 正

90年東京ブックフェアは七月十九日から二三日の五日間、池袋サンシャインシティを会場に開催された。日本書籍出版協会はじめ出版関係六団体あげてのこのブックフェアも四回目を数えるが、今回は「知の大海原——本はわ・れ・ら・の宝島」をメインテーマに、会場面積も前回の一・七

倍の二七〇〇坪に拡大、出展総冊数二五万冊、入場者総数一五万三〇〇〇人、即売総額三〇〇〇万円（除くブース）といずれも過去最高の数字を示した。

また、ジャンル別展示や出版社別ブースもそれぞれ独自の工夫が凝らされ、訪れた人々への応対もよくなったといわれ、これらがブックフェアを「成功」の二文字で飾る

大きな根拠となっており、主催者側は「多数の読者に定着してきた」と「確信」をもつまでに至っている。

このような状況認識に痛烈な批判を加えたのが「だれのためのブックフェア」（朝日新聞）七月二九日・読者欄コラム「とびら」の（丸）氏である。「このブックフェアにいけば、気になりながらも買いそびれた本、書店では手にとれなくなった本と出会えると思っていた。ところが、出版社ブース百社のうち自社の本をまともに読者に向き合わせていたのは数社にすぎなかった。ジャンル別展示も大手書店では得られないフェア独自の意義を感じさせるものは質量ともに乏しかった。一体、何のための、だれのためのブックフェア

アだったのか」と厳しい。

入場者数や売上金額などの結果だけで、手ばなしで喜べるのか。主催者側の自己満足に終わっていないか。その点でいえば、ブックフェアの目的「読者謝恩と読書推進」の観点に立ちもどるべきだろう。この視点からみてどうだったのかをこそ検討すべきだろう。

しかし、ただか今回を含めても四回のブックフェア経験しかないのである。読者謝恩と読書推進のためのフェアとはいかなるものなのか。読者の多様な関心や期待にどう応えうるのか、まだまだ、試行錯誤の段階ではないのか。もっと長いレンジでブックフェアを促していく発想が不可欠だろう。

*

ところで、人文書コーナーでは、店舗名をヒューマニティ・アイランドと名づけ、「時代の転換期」という問題意識から「二二世紀へ・〈知〉の遺産」をテーマに、哲学・思想、心理、宗教、歴史など二五分類で約一万二〇〇〇冊を展示した。また、①家族を考える、②平成二年の新刊書の二つをコーナー展示とした。

そして今回、特別企画として、読者と読書を意識した新

しい試みを実施した。安江良介氏（岩波書店社長 執筆の小冊子『仁と元——転換の時代に本を読む』（A5版・32頁）を一万部発行し、入場者に配布、巻末には、安江氏の選んだ一〇〇冊の本をリストアップすると同時に、特別コーナーとして、この一〇〇冊を展示したのである。

この試みは地味でそれほど話題にならなかったようにみえるが、読者に対して積極的にかかわっていかうとする点で、看過できない側面をもっているのだ。ブックフェアはわずか五日で終わるが、読書はもっと継続性のあるもの、そして奥が深い。そこで、ブックフェアを一つの契機として、この『小冊子』を手がかりに、古典や専門書がもっともっと読まれることを期待したのである。安江氏は「私がかつて読んだ古典によっていま、時に目が洗われるような、思考の鍵を得るのは、……深いところに根ざした書物の力がおのずから私の蒙を啓いてくれるのだという思いがあります。古典の力こそが最も現実的な力を発揮するという体験を、いま私は実感しています」と述べているが、古典や専門書を読むことの本当のおもしろさを自らの手で獲得する絶好の機会を提供できればというわけである。

*

それにしても、どの本をいかに読むかは、大げさにいえば「永遠の課題」といえるかもしれない。

ドイツの哲学者ショウペンハウエルは『読書について』のなかで、「精神のための清涼剤としては、ギリシャ、ローマの古典の読書にまさるものはない。たとえわずか半時間でも、古典の大作家のものではあればだれのものでもよい。わずか半時間でもそれを手にすれば、ただちに精神はさわやかになり、気分も軽やかになる」「一般読者の愚かさはいままで話にならぬほどである。あらゆる時代、あらゆる国々には、それぞれ比類なき高貴な天才がいる。ところが彼ら読者は、この天才のものをさしおいて、毎日のように出版される凡俗の駄書、毎年はいのちのように無数に増えることを強調している。時代と状況を超えて首肯しうる言葉ではないか。

また、経済学者都留重人は「一生のうちに一人の人間が本当に読みこなせる本は……（略）……われわれ普通の人間はせいぜい三千冊、つまり一週間に一冊というのを限界と考えた方がよいかもしれない」（『読書遍歴は独り旅で』『私の読書法』所収）と述べているが、そうすると、これから先何年生きるかによって、何冊読むことが出来るかが計算でき

る。そこで、「これから読む一冊ずつを慎重にえらび且つ大事に読むこと」（同上）と読むべき本の選択の「貴重さ」を語っている。

毎日一〇〇冊をこえる書籍が刊行される日本の出版状況のなかで、どの本を選んで読むかはむずかしい問題になっているのだ。だから読書ガイドンスが必要になってくる。安江氏は『小冊子』のなかで、「大学では、外書講読の時間と同じように、『読書指導』あるいは『読書』の講座を設けるべきだ」と指摘している。とくに、今日のような、一方における専門分野の一層の進展、他方における限りなく多様化する問題関心や発想の拡がり、をあわせもつ学問・思想状況を考えると、読書に対してどこからどう手をつけていけばいいのか、思い悩むのも当然かもしれない。その点で、この『小冊子』が、今日の巨大な転換期における「読書ガイドンス」としての役割を発揮することが期待されるのである。

さらにいえば、この試みが東京ブックフェアだけで終わるのではなく、全国各地の書店店頭等で、「読書」の手がかりとして、この『小冊子』がどんどん活用されることを心から願うものである。

仁と元

—— 転換の時代に、本を読む

安江良介

安江良介 RYOSUKE YASUE

ジャーナリスト、前『世界』編集長。一九三五年石川県生まれ。金沢大
法文学部卒業後、岩波書店に入社し、『世界』編集部を経て67年、美濃部
革新市政の報道・政策担当特別秘書に。71年に『世界』編集部に戻り、翌
年編集長。88年に常務取締役になるまで、17年間、朝鮮問題などに意欲的
に取り組んできた。著書に『世界』の40年、『孤立する日本——多層危機
のなかで』など。現岩波書店社長。

古典を読み直す

近年は、かつて読んだ本を書架からとり出して読み直すことが多くなりました。その多くが古典といわれる本です。

私は格別の読書家ではありませんが、仕事にかかわって、当然ながらかなりの新刊の本を求めますし、贈られる本もあります。それらの本は、枕許に五、六十冊積んであり

——恥しい話ですが、私は寝そべって読み、原稿も同じように腹ばいになって書くことが多いので——、それに手を伸ばして早朝に読むのが日常ですが、時に本棚に立ち、二、三十年前に読んだ本をとり出して、読みかえし、あるいは読みふけることがしばしばあります。そして、実に鮮やかな印象やリアルな響きをこれらの本から受けとります。

若いときに読んだ本をいまにいたって初めて理解しうるというのは、若いときに如何に読み方が浅かったのか、如何に独善的に読んでいたのかという点でもあり、そのことを省みて恥しくもあり、また、とり返しのつかない悔いをも感じます。高校生の頃から先輩たちに「本は問題意識をもって読まねばならない」と教えられ、それらしき意識をもって読んできたのですが、そのことの正しさをあらためて肯定しながらも、他面では、「自分の問題意識」は独善・

偏狭に陥る危険をもっていることを知らされます。やはり、読書は、ある程度「世につれ、人につれて」素直になされるべきでありましょうか。良き師——学校の先生は勿論ですが、先生に限らず先輩・友人、あるいは書評・ガイドなどの良き導きを得た読書こそ、最も必要なことであります。ついですが、かねての主張を申しあげさせていたきたいのですが、私は、大学では、外書講読の時間と同じように、「読書指導」あるいは「読書」の講座を設けるべきだと考えております。できれば必須四単位で毎学年に課すべきではないかと考えています。

大学生協は学生の読書意欲を刺激するようにさまざまな工夫を試みながら、学生の読書傾向の調査を継続的に行っております。貴重な調査であります。敬意を抱きながら、私はその調査結果を見てきているのですが、大きくいえば——私見ですが——、次の三つの傾向が示されています。

一、学生の読書量は減ってはいいない。満足すべきものとはいえないが、減る傾向にはない。

二、しかし、読書力は確実に落ちている。難しい本を読む力は目に見えて低下している。大学生協では「学生の読書」と「一般の読書」に差異がなくなっている、とみている。

三、教授が講義の中で薦めた本は読む率が高い。勿論、教科書・準教科書と指定された本は読む。近年、この傾向は進んでいるが、それだけ学生が受動的になっていることを示している。

この調査の中に「読んだ本について誰と話しますか」という質問があるのですが、「家族と話しあう」という項目の数値が、意外に高いのです。このことを肯定的にみる評者もありますが、私には、家族と話しあう本とはどのようなものなのか、想像が付きません。赤川次郎さんや渡辺淳一さんの本でしょうか。大学生協が指摘するように、「学生の読書」というものはなくなりつつあるのでしょうか。

また、理科系の学生の読書に対する関心は文科系に比べてかなり弱いことが調査に示されています。当然のように思われがちですが、かつてはどうだったのでしょうか。寺田寅彦の流れを継ぐかのように、その専門をこえて哲学や文学を熱心に読む学生は決して少なくなかったのではないのでしょうか。ある学生の答え——いわゆる有名大学の理科系大学院学生ですが——には「本を読むことなど必要ない。読書によって得られるものはない」というのがありました。ここでいう「本」や「読書」とは、おそらくは専門書以外の本や読書を指しているのだろーうと思われまゝす。理科系大

学院の実験室にはマンガや劇画の本が積重ねられており、実験を終えた学生たちがそれに群がる、というのはもう以前から耳にすることです。マンガや劇画が悪いというのはありませんが、高度科学技術時代の担い手たちの思考力と感性がこれでは如何かと、やはり、気になります。

マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で述べたこと、即ち、近代資本主義の究極において出現するのは、「精神のない専門人、心情のない享楽人」かもしれないという予言が思いかえれざるをえません。こうした学生の読書のありようは大学の責任によるものではなく、直接には管理・偏差値に縛られた中学校教育によるものだと、私は思うのですが、中高校にいわせれば、大学入試のあり方に縛られているのだということになりましようか。しかし、タマゴとニワトリの後先の争いはおくとすれば、少なくとも、大学において、専門の勉強をたすけ、また専門の弊を除く読書教育が行われるべきだと、私はかねて主張しているのです。

本題に戻りましよう。私がかつて読んだ古典によって、いま、時に目が洗われるような、思考の鍵を得るのは、私の往時の読書の弱さの埋め合わせではありませんが、同時に、今日の時代が巨大な転換のときにあたり、その転換の

幅といえますか、転換にかかわる裾野は、五十年、百年、あるいは二百年、三百年という大きなものであり、従って、深いところに根ざした書物の力がおのずから私の蒙を啓いてくれるのだという思いがあります。古典の力こそが最も現実的な力を発揮しようという体験を、いま私は実感しています。

例えば、新カント学派の哲学者エルンスト・カッシーラーの『国家の神話』は、何度か読んだ本ですが、私には、いま新たな響きをもたらすものの一冊であります。この本は、日本では宮田光雄教授のすぐれた解説と訳によって、一九六〇年に刊行されました(創文社)。原書は一九四四年に脱稿され、一九四六年に刊行されましたが、この間、一九四五年四月に——ナチス崩壊一カ月前ですが——カッシーラーは亡くなり、最後の著書として遺されました。

この本の冒頭にカッシーラーは「われわれは、過去三十年間、第一次世界大戦と第二次世界大戦との間の時期に、政治生活および社会生活の深刻な危機を経験したばかりでなく、また幾多のまったく新しい理論的な問題にも直面してきた。われわれは政治的思惟の諸形式が急激に変化するのを体験した。諸々の新たな問題が提起され、そして新たな解答が与えられた。……政治的地平線にかくも突如とし

て現われ、そしてある意味では、精神のおよび社会的生活の性格に関する従来の一切の観念を逆転さすようにみえた、この新たな現象を、どのようにすれば説明できるだろうか」と書き出しています。執筆された時代の背景と重ねてみるならば、カッシーラーの問題意識はまことに明白であります。訳者・宮田教授は「本書は、彼の象徴形式の哲学にきわまる神話、宗教、言語、科学についてのほぼ半世紀にわたる長い哲学的研究と、さらにその数多くの業績に示される該博な哲学史的研究の成果とを集成成して、時代の問題に対決したものといってもよいであろう」と書かれています。

そして、その「結語」を私は何度か引用し紹介してきたのですが、カッシーラーが文字通り最後に遺した次の言葉は、今日、激動の時代にあつて反芻されるべき言葉だと、私は思います。

《われわれが現代の政治的生活という厳しい学校で学んだことは、人間の文化が、われわれのかつて考えていたように、鞏固に確立されたものでは決してないという事実である。われわれの西欧文明の基礎を築いた偉大な思想家、科学者、詩人、さらに芸術家たちは、しばしば、彼らの確

立したものが永遠に存続しうるものと信じていた。ツキユ
ディデスが従来の神話的な歴史の扱い方に反対して、新しい
歴史の方法を論じたとき、彼は、自分の著作を《永遠の
財宝》と述べた。ホラティウスは、その詩を、かぎらない
歲月や時代の経過によっても破壊されることがない《青銅
よりも恒久なる記念碑》と呼んだ。しかしながら、われわ
れは、人間文化の偉大な傑作を、はるかに謙遜な仕方であ
めなければならぬように思われる。それは永久的なもの
ではないし、また論駁の余地のないものでもない。われわ
れの科学や詩や芸術、さらに宗教は、非常に深さにまで達
している古い地層の上の単なる新層にすぎない。われわれ
は、われわれの文化的世界や社会的秩序を、その根底その
ものから揺り動かせる激動があるかもしれないことを、つ
ねに予期していなければならない。

神話と他の偉大な文化的勢力との関係を明らかにするた
めに、おそらく神話そのものから採ってきた比喩を用いて
もよいであろう。バビロニアの神話には、世界の創造を述
べた伝説がある。それによれば、最高の神マルドゥクは、
その業を始めうるまえに、怖るべき闘争をしなければなら
なかった。彼は蛇ティアマトやその他暗黒の竜にうち勝ち、
それを服従させなければならなかった。彼はティアマトを

殺し、竜を縛りつけた。怪物ティアマトの死体から、彼は
世界を作り、それに形態と秩序を与えた。彼は天と地、
星座と遊星を作り、その運行を定めた。彼の最後の業が人
間の創造であつた。このようにして、原始的混沌から宇宙
秩序は生れ、それはさらに永遠に保たれるであろう。「マル
ドゥクの言葉は永遠であり、その命令は不変である。いか
なる神も、彼の口から出ずるものを変えることができな
い。」とバビロニアの天地創造の叙事詩は歌っている。

人間文化の世界は、このバビロニアの伝説の言葉で叙述
することもできるであろう。それは暗黒の神話が戦いとら
れ、征服されるまでは、現われることができなかった。し
かし、神話的怪物は完全には破壊されなかった。それは新
しい世界創造のために用いられたが、なお、この世界のう
ちに生きながらえているのである。神話の威力は、より優
れた勢力によつて阻止され、服従させられた。こうした勢
力、知的・倫理的および芸術的勢力が十分な力をもってい
るかぎりには、神話は馴らされ、従わされる。しかし、ひと
たび、それらの勢力が力を失い始めると、混沌がふたたび
到来する。そのとき、神話的思惟がふたたび現われ、人間
の文化的・社会的生活の全体を支配し始める。》

実存哲学のカール・ヤスパースの言葉の前にも、私は立ちどまらざるをえません。ヤスパースは、西側の自由主義の立場にあつて、東西兩陣営に対してきびしい批判を行い、とくに、全体主義支配の現実を最も深刻な危機として指摘してきましたが、同時に、核兵器の出現によつて、人類にとつて「まったく新しい状況が作られた」という危機感を抱き、『原爆と人間の将来』を著わしました。一九五八年、三十二年前のことです。

この本は、一九五七年に同じ題名で多くのドイツ語放送局で伝えられたラジオ講演（『世界』一九五八年五月号に紹介）の主題を、哲学・歴史・政治の基盤に拡げて執筆されたものです（邦訳『現代の政治意識』上・下、飯島宗享・細尾登訳、理想社）。ヤスパースは、この本を次のように書き始めています。

「ひとつのまったく新しい状況が原爆によつて作られた。全人類が肉体的に滅亡することになるか、それとも人間がその人倫的・政治的狀態において変わるようになるか、二つに一つなのだ。この二重に非現実的に思われる二者択一を、この書物は明瞭にしようと試みるものである。見かけは平穩無事な日常のもので、こんにちでは、怖るべき脅威をなす発展が、抵抗しがたい観を呈しながら進行してい

る」。

こうして、私たちの理性が問われているものは何かについで論を進める中で、ヤスパースは、こう言います。

「何が政治的現実リヤリティにおいて可能であり、また何が突如として現実的でもありうるかに關しては、現実主義者自身が欺かれる。すなわち、脆弱になつていて慣習の道具立てで籠絡されている社会の状況において、邪悪な者において、遠慮会釈ない全体主義的計画の強請のもとでの不安によつて可能となるもの（ヒットラー・ドイツによる六百万ユダヤ人の殺戮にまで及ぶ）——、または、善良な者において、嘘の生活の耐えがたきゆえに正義への訴えかけをもつた犠牲的精神によつて起こるもの（一九五六年のハンガリーの暴動）——、それは、現実主義者たちにとってはいつの場合でもまったく不意打ちのことである。超政治的なものにもとづいてこそ、まなざしは一方では最も深い奈落の底にまでとどき、他方では最も高いもろもろの可能性にまでとどくのである。」

わが国の近年の思想状況、あるいは国民心理の特徴は、いわゆる「現実主義」の隆盛、あるいは、それへの降伏であります。政治の現状に埋もれ、それを黙過し、それに身を寄せてゆく動きが、知識人やジャーナリズムにとりわけ

て顕著にみられますが、その「現実主義者」たちは、このヤスパースの三十年前の予見をどのようにうけとめうるのでしょうか。

四つの転換期

人類の歴史に「転換」や「危機」の言葉を必要としなかった時代はなかったというべきですが、それにもかかわらず、私たちは、いまや巨大な転換の時代の真只中にある、との実感をもっております。

その転換の時代の様相と意義は、あたかも富士の山裾を見るように、おのずから大きなスロープ、長い時間帯をもつものとなっております。即ち、今日私たちが眼前にしている危機と変化は、突如あらわれたものではなく、多くは、三十年前に遡る一九六〇年代前後からその姿を見てきたものであります。

たとえば、中ソ対立、あるいは東欧諸国におけるスターリン体制の深刻な矛盾が、その一つです。一九五三年にスターリンが没して三年後の一九五六年二月、ソ連共産党大会でフルシチョフ書記長によるスターリン批判が行われますが、ポーランドのポズナニで起った反政府行動とそれへの抑圧は、同じ年の六月のことでした。同じく十月、プタ

ペストでは、学生・労働者による反政府行動が拡がり、民衆の支持によって生まれたナジ政権は、一党制の廃止と自由選挙実施、ワルシャワ条約体制脱退と中立を宣言しました。ご存知のように、これらのことは、それから三十三年を経て今日の東欧において現実のものとなった主張でありました。しかし、当時は、ナジ政権はソ連軍の介入によって崩壊し、のちにナジ首相が処刑されたことが明らかにりました。

一九六〇年秋に、米国ではケネディ政権の誕生が決まりました。それは、デーヴィッド・ハルバースタム氏の著書『ベスト・アンド・ブライテスト』（サイマル出版会）の題名通り、米国の輝かしさの全てを集めたというイメージを与える政権でした。そして、翌年大統領に就任したケネディ氏自身、一九六〇年代は「黄金の六〇年代」であると称して華やかな虹をかけました。だが、米国の力の低下が始まったのは、まさに、この六〇年代でありました。

「黄金の六〇年代」というケネディの言葉は裏切られ、文字通り虹に終わりましたが、ケネディ大統領のもう一つの言葉、「いまや、世界は相互依存の時代に入っている」といったことは適中いたしました。東西関係・南北関係、そのいずれにおいても今日の国際関係は深く入りくんだ相互依存

体制であります。レーガン政権がソ連をして『悪の帝国』と呼んでいた時期にも、米国がソ連に大量の小麦輸出を行い、そのことが米ソ双方に必要欠くべからざることであったことはよく知られています。

こうした既に私たちが見てきた転換の諸相がさまざまな形をとって大きくクローズアップされているのが今日の状況といえますが、しかも、それらは、ドーナツを重ねたように層をなして私たちの眼前につきつけられているような思いが、私にはあります。このことを指して私は、現代の特質は多層危機にある、ともいつております。それらは、いずれも深刻な危機、あるいは巨大な課題であります。しかし、西ドイツの前首相ヘルムート・シュミット氏は、日本語で書く、「危機」の「危」はDangerあるいはRiskであるが「機」はChanceであって、私たちが選択を誤まることになれば、新しい時代を拓くことができる可能性を示しているではないか、と語っております。

層を重ねたようにといいましたが、その一つの層は、第二次大戦後の世界秩序の終焉であり、その二は、二〇世紀の終幕、その三は「近代」の終わりあるいは問い直しであり、これに加えて、地球社会そのものの存在にかかわる危機的状況が進行しています。

戦後秩序の終幕

昨年（一九八九）十二月、地中海マルタ島で行われた米ソ首脳会議は、「ヤルタからマルタへ」といわれたように、米ソ両極を軸とした第二次大戦後の国際政治の終幕を告げるものでした。

一九四五年二月クリミア半島の保養地ヤルタで行われた米英ソ三国首脳会議は、国連の運営、ドイツの分割をはじめとする東欧再編、ソ連の対日参戦とそれに伴う日本北方領土のソ連領有を決定しました。並行してのローズベルト・スターリン会談では、朝鮮統治などの極東構想の線引きも行われました。それは世界大戦の終わりを告げようとする会議であつたにもかかわらず、時を経ずして東西冷戦構造に発展する、新たな対立へのスタートでもありました。

ヤルタ会談の八日間は快晴に恵まれたそうですが、そこに起因もしたその後の米ソ両極・冷戦の国際政治の推移を思うならば、むしろ異様な好天だったといふべきなのかもしれません。即ち、パクス・アメリカーナ（アメリカの平和）といわれ、またパクス・ソビエチカ（ソ連の平和）といわれた二極構造の対立は、外には際限ない核軍拡競争を進め、支配圏における民族自主権への抑圧を重ね、内には、

権力と民衆の対立を深刻に進めるものでした。パクス・アメリカナの実質は、アメリカにおいてはみずからの平和であるにしても、朝鮮においては民族の分断と抗争であり、フィリピンにおいてはマルコス政権の腐敗と民衆抑圧であり、パクス・ソビエチカの実質は、ソ連におけるスターリン体制と東欧諸国に対する制限主権論、即ち民衆と民族への抑圧でした。

このヤルタ体制は、嵐の中に行われたマルタの米ソ首脳会談によって終幕を印象づけました。ヤルタ体制をつき崩した要因はさまざまにあげられますが、直接の動因は、社会主義体制の破綻であります。ソ連経済のゆき詰りとその再建（ペレストロイカ）、米ソ間の緊張緩和と核軍縮の実践、東欧諸国における一党独裁の放棄、そしてベルリンの壁の崩壊からドイツ統一の現実化へという、まさに嵐のような激動は社会主義体制の政治的・経済的・思想的破綻を示す以外の何ものでもありません。今年（一九九〇）二月に行われたソ連共産党拡大中央委員会において、ゴルバチョフは次のような「報告」を行いました。

「過去数十年の間に深く浸透したイデオロギー的教条主義、内政での時代遅れの固定観念、世界革命の過程や世界情勢全般についての、時代遅れの見解を放棄しなければなら

ない。社会主義諸国を世界文明の主流から孤立させたすべてのものを放棄すべきである。進歩が社会的に異なる世界との恒久的対決を意味するという見方をも放棄すべきである。」ここには、まことに直截に、社会主義の教義と実践の全否定が述べられております。しかも、ゴルバチョフは、その改革が全く進んでいないことをも語らねばなりません。「報告」の中で、「残念なことに、私たちはペレストロイカのなかで誤算や過ちを犯すのを避けることはできなかった。このことがまた事態を紛糾させている。」「昨年の経済実績はまたもや経済の過程の矛盾に満ちた性格を示している。」「消費者市場の混乱や不足、行列が拡大し、ルーブルの購買力が低下している。状況は闇経済活動や犯罪的要素によって悪化しつつある。」「経済にひずみが生ずる一方で資源が不足している。さらに市場では基本的商品すらも不足している。」と語っております。

高く掲げられてきた栄光と使命感から、すべての粉飾とユートピアを剥ぎとったかのような現実認識——これをもつて、わが国の一部にみられたように「社会主義体制に対する自由主義体制の決定的勝利」とみる人たちが出てくるのも、当然のことであります。しかし、一方の破局は他方の優位の決定というような単純な二元的二分法によつ

て、今日の轉換の現実をみるのが當を得ているのでしようか。

兩極体制による冷戦構造が四十年つづく中で、ついに一つの体制が音を立てて崩れましたが、他方の体制もかつての圧倒的優位を失いつつあります。また、体制の崩壊をもたらしたものは、体制みずからの破綻であると同時に、民衆の力のかつてない浮上であり、民衆の声と力を無視しては東西いずれの陣営においても権力は存在し難いことを示しつつあるという事実であります。このことは政治社会における画期をなすものであります。

しかし、その樂觀あるいは希望の反面で、民衆の力が国家に優位するという新しい状況がそれにふさわしい新しい秩序やルールを見出しえていないという困惑にも、私たちは当面しております。挫折と犠牲を重ねながら自由を求めて持続された感動的な闘争によって古い体制を崩壊せしめた人々が、陳腐な西側陣営に異常なほどの憧れを示しているのは、自由への渴望と経済的落差の故でありましょうが、その彼らがいずれは新たな失望と矛盾に陥らないと、誰が確信をもっていえるのでしょうか。このことに加えて、私は、二つの間が私たちの前にあることをつよく意識せざるをえません。

その一は、社会主義の破綻は、社会主義の理念の故ではなくその実践の誤まりによるものなのか、それとも、社会主義の理念そのものが誤まっていたことによるものなのか、という問であります。こうした問は、社会主義の理論家および反社会主義の理論家に委ねればよいことであつて、専門家でもなく社会主義者でもない私には無縁のものかもしれません。

しかし、社会主義の実現を求めて、どれほどの人々が運動に参加し、捕えられ、傷つき、拷問を受け、死にいたつたことでしょうか。それにも屈せず革命の成就をみたのちに肅清と強制労働の無惨を体験した人々の数がどれほどにのぼるのでしょうか。流された涙は大河を成し死屍は累累としてその姿に限りはないというべきではないでしょうか。その悲しみと苦しみは、社会主義の理念の誤まりによるものなのか、それとも、その実践と体制の誤まりによるものなのか——社会主義の是非をこえて同時代の人間性を問うものであると、私は思います。

もう一つの問は、社会主義の挫折が即ち資本主義の勝利といえるのか、であります。いうまでもなく、社会主義は産業革命以来の資本主義体制の深刻な矛盾の中から生まれただけであり、社会主義の視野の中にはどの国にもみられ

た、あるいは現にみられている「女工哀史」の現実があり、社会主義者の心には、——少なくともそのスタートにおいては——熱いヒューマニズムがありました。他方、社会主義の台頭は、自由市場中心の資本主義に恐怖を与え、資本主義は多くの修正と自由の抑制によって今日にいたっています。資本主義は社会主義に多くを学んできたのに、社会主義は、イデオロギー的教条主義に守られた無謬性と官僚主義のためなのでしょうか、資本主義から何らのことを学ぼうとしなかったというべきなのでしょう。

しかし、そうした政治・経済のシステムと運営に関わることにとどまらない、より本質的な間が私たちに向けられております。昨年十月にチェコスロヴァキアの反体制劇作家、バーツラフ・ハベルがドイツ書籍商組合平和賞を受賞しましたが、この授賞式に寄せたスピーチを私は深い思いで読みました（『世界』臨時増刊号「東欧革命」）。一九七〇年代から拘留・監禁・逮捕・起訴をくり返されてきたハベルは、昨年十月にも旅券を交付されず、この平和賞をみずからの手に受けることはできなかったのですが、それから十週間の後、十二月二十九日には大統領に就任しました。そのハベルのスピーチに耳を傾けてみましょう。

「初めに言葉ありき、私たちが知っているもつとも重要な

書物の一つの第一ページにはこう書かれています。これは、あらゆる創造の源泉は神の言葉である、という意味です。しかしこのことは、比喩的な意味で、あらゆる人間の行為にもあてはまらないでしょうか？ 言葉は私たちを存在させているものの本当の源ではないか」とハベルはいいながら、「世界を動かす言葉の力を私たちはずっと昔から信じている」が、けれども、「本当に人間の言葉は、それが世界を変え、歴史に影響を及ぼしうるほど強いものではないか？ そしてかつてそれほど強かったとしても、それは現在でも通用するのでしょうか？」と問いかけ、みずから答えています。

「私が言いたいことは、言葉というものは、秘密に満ちた、多義的な、^{アンビヴァレント}両面価値の、背信的な現象である、ということです。それは、……闇の王国の中の一本の光線でありえますが、しかし死をもたらず矢でもありうるのです。……いったいレーニンの言葉はどんなふうだったのでしょうか？ 解放的あるいは反対に虚偽的だったのか、危険で結局は隷属させるものだったのか？……いったいマルクスの言葉はどんなふうだったのでしょうか？ それは社会機構のすつかり隠された地平に光を投げたのでしょうか？ それとも後の恐るべきあらゆる収容所の萌芽にすぎなかったでしょう

か？……さらに歩を進めて、もっと挑発的な問いを出してみましよう。いったいキリストの言葉はどんなふうだったのか？ それは救済の歴史の始まり、世界史の中で文化を創るもつとも力強い衝撃の一つの始まりだったのでしょうか、それとも十字軍、異端審問、アメリカ土着文化の根絶、つまり白人種の矛盾した拡張全部の精神的萌芽だったのでしょうか？」

そして、現実に戻して、こうもいいます。「世界中に今日、すばらしい希望に満ちた言葉『ペレストロイカ』が鳴り響いています。私たちだれもが、この言葉の背後にヨーロッパと全世界のための希望が隠れていることを、信じています。しかしながら、時々不安におののくことがあるのです。……すなわち、今日クレムリンに坐っているあの勇敢な男も、時々——もしかしたら絶望のあまり——ストライキの労働者、あるいは反抗する国民、あるいは国民の少数派、あるいは少数派のあまりにけたはずれの意見に罪を着せるのです。ペレストロイカを危うくするのは彼らだ、と。私は彼を理解できます。……それにもかかわらず私は自分に言いよかせます。この『新しい考え』の中には、古い考え方のいかかわしい遺物が含まれていないだろうか？」

第二次大戦後の世界秩序、即ち、米ソの時代の終幕は、

その現象にとどまらず、ハベルの言葉の沈痛な響きにあるように、深い意味を私たちに投げかけております。

二〇世紀をどう把えるか

一九八九年は戦後国際政治の終焉を嵐のようにして告げるものでしたが、その年があげて迎えたのが一九九〇年であります。誰もが、二〇世紀の終わりの始まりを実感させられています。その二〇世紀とはどのような時代として把えることができるのか——これも、私たちに向けられた問であります。私たちは、この問に対する十分な議論をみるにいたっていませんが、次の時代の予見は現実の深い把握なくしては不可能でありましよう。

二〇世紀は、初めて社会主義国家の成立を見るとともに、早くもその破綻を見た時代であり、二度の世界大戦を体験し、初めて人類が核兵器の「威力と悲惨」(大江健三郎氏)を体験した時代であります。遺伝子工学とコンピュータ科学の急速な開発・進歩によって人間が期待と恐怖の未知の世界に入ろうとしている時代であります。「グローバル」という言葉を、一つには人権問題において、また一つには環境問題において、人類が切実に受けとめはじめた世紀でもあります。

二〇世紀はまた、米国の時代であったともいえるでしょう。落日の大英帝国に代わって、米国は先進工業国のチャンピオンとなり、満ち溢れる消費文明をつくり出しました。第二次大戦終結時には、米国の貯蓄は二五〇〇億ドルに達していました。当時の米国の巨大な輝くような姿は、今日の若い世代には想像も及ばないことなのではないでしょうか。米国は、世界最大の工業国であると同時に、石油や農産物をはじめとする最大の資源国でもあり、世界のGNPの半分をもち、ドルは不動の力であり、一時期には（一九四九年まで）米国だけが核兵器を保有していました。加えて、米国は、ハワイを除いては自国領土を戦禍にさらすことがないという幸運に恵まれたのですが、日独伊のファシズムとの闘いに勝利をもたらした英雄という光栄さえ背に受けていました。

その米国の力は、「朝鮮戦争のための支出、冷戦に応じた兵器のための支出、さらにのちにはヴェトナム介入の度が深まったための支出によって」（J・K・ガルブレイス『経済学の歴史』ダイヤモンド社）次第に弱まり、七〇年代以降はいわゆる「双子の赤字」、財政と貿易の赤字に苦しむようになりました。その結果、一九八五年には、米国は一九一四年以来はじめて債務国に転じ、しかも、たちまちブラ

ジル・メキシコなどの国を追い抜き、世界最大の債務国となりました。米国の経済学者レスタ・サロー氏によれば、「アメリカ経済を運営してゆくためには、我々にはよその国から年間二千億ドルほどの借金がなければなりません」という事態にいたり、現在五千億ドルの債務が一九九二年には一兆ドルに達するだろうとみられています。そのときの利子は年間六百〇七億ドル（八兆円から一〇兆五千億円）であります。

米国内の企業活動においても、疲弊が拡がっています。M&AやLBOといわれる、企業の買収・合併が盛んですが、とくに、LBO（Leverage Buy Out）は、対象企業の資産を目当てに金を借りて買収し、ときにはその資産を分け取ろうというものですが、米国の企業の多くはこうした敵対的なテーク・オーヴァ（買収行為）に対抗するために借金をしており、過去七年間にこのための企業の負債は五千億ドルも増えている、そのため、米国でかなりの景気後退が生ずれば、負担に耐えかねて倒産する企業が大量に出るとみざるをえない、と憂いている米国のエコノミストもいます。これでは、自由市場経済というよりは猛獣の世界というべきでありましょうが、乱脈をきわめている世界の金融市場をとらえて、もはや「資本主義経済」ではなく、

「ギャンブル」だと嘆く経済学者もいます。ロンドン大学のスーザン・ストレンジ教授は『カジノ資本主義』（岩波書店）という興味深い本を著わしましたが、彼女のいつていることを、ごく乱暴に紹介しますと――。

一九七三年に為替の変動相場制に切り替わってから、世界中の為替相場や金利や物価が激しく動きやすくなってきた。そして、アメリカが「双子の赤字」を出し、これまでの世界通貨など基準になっていたアメリカが変わってきた。世界の国際収支が「不均等拡大」している。猛烈に借金をしている国があり、日本のように猛烈にカネを貸している国がある。貿易摩擦が出ている。ヨーロッパでは失業が増えている。発展途上国では益々借金が膨らんでいる。

そういった全体の不安定状況の中で、最も困ったことは「金融革命」という形で、金融市場が世界的に自由化され、しかも新しい「金融商品」がドンドン入ってくる。そして「先物市場」が活発化し、コンピュータに予めシュミレーションによってセットされ、コンピュータが売買する形になっている。その結果、毎日の為替、金利、株価の動向がいずれも変動が激しくなり、経済の将来を予測できなくなってきた。即ち「ギャンブル」のような資本主義である。

そして、彼女は最後にこのように結んでいます。

「一九九九年二月三十一日、われわれは一つの世紀の終わりに到達する。もしその時まで、われわれは依然として、幸いに核兵器による大虐殺を経験していなければ、それは大変祝賀すべきである。しかし、核戦争は免れたとしても、『金融カジノ』『金融ギャンブル』の熱気を冷ますことができ、コントロールし、経済の安定的な道を作り出していなければ、一九九九年二月三十一日に出現している光景は何か。命をかけて『マネーゲーム』を行っているギャンブラーたち。彼らが資本主義世界の都心にそびえ立つオフィスビルの中で生き生きとして、それ以外の大都市はいずれも死の街になっている。」

勿論、アメリカ経済がこのまま衰退の一路をたどるといふべきかどうか、大いに議論もありうるでしょう。一九九〇年代半ばには米国経済の再興をみるだろうという有力な見方もありますし、「日はまた沈む」（ビル・エモット）と日本経済の後退を予見する見方も話題になっています。米大統領経済諮問委員長をつとめたM・フェルドスタイン氏は一九八九年の初頭に「ドルは今後二、三年のうちに現在の水準（このときは一ドル＝一二〇～一三〇円でした）

から一ドル＝一〇〇円にまで下落するでしょう」と語りましたが（日本放送出版協会『九〇年代世界はどう動く』、その一年後には円安をみて、一ドル＝一七〇円のレベルをこえるかが話題になったりしています）。

即ち、いずれの予測が優れているかどうかではなく、誰もが把え難いはげしい変動期に入っていることをこそ見るべきなのであります。はつきりとわかっているのは、米国の中心となってきた二〇世紀が終わりつつあるということであり、アーノルド・トインビーがアメリカ人の「顕著な美点」としてあげた寛大さも次第に見え難くなりつつあるのではないかという変化であります。

二〇世紀とはどのような時代としてひと括りにできるのでしょうか。人類の歴史はある時代をもってひと括りにできるものではなくなっているというのが正しいのかもしれませんが。いずれにしても、私には、二〇世紀とはこんな時代だった、と把え出してみせる力は全くありません。

二〇世紀のさまざまな分野でみられた興亡——その現象を見てはつきりといえることは、人類は無限の可能性を手にしながらも、動かし難い限界を実感させられた時代であったといえるのかもしれませんが。理想と絶望の交錯は、人間がその始まりから知らされてきた宿命であります。

しかし、「限界」を物質的にも精神的にもこのようにはつきりと知らされた時代はかつてなかったのではないのでしょうか。隣国のすぐれた詩人、金芝河氏の言葉を借りましょう。

「毎日毎日、長時間の厳しい労働の中で多くの人々が自己の生を磨り減らしながら、生態系を破壊し、消費者の生命を脅やかし、奇形化させている。そして、都市の騒音、煤煙、交通の混雑、人間関係の乖離、不信、相互敵対、敵対の深化、競争、弱肉強食、淘汰、暴力、戦争雰囲気の高調など、これらすべては、生きる代価としてわれわれが支払わなければならないものである。世界は、ある意味で前に進みながら、ある意味で後戻りしているのである」（『生命の文化』、岩波書店刊『現代文明の危機と時代』の精神）所収。

「近代」の問い直し

金芝河氏の言葉につづけていえば、私たちが日常の喧騒——豊かさと貧しさの混在の中で痛感させられているのは、実質的なモノと実質的な思考が私たちの社会から次第に姿を消しつつあるのではないかという淋しさです。この淋しさ、あるいは不安はどこからくるものでしょうか。一つの示唆があります。

「現代の文化を支配しているもの、の、考、え、方、によると、真、実、は何よりもまず数理的にとらえられ、そして数理的に、できるならば数字によつて表現しうるものでなければならぬ。裏から言へば、いつ、そしてどこでも通用するような、いわゆる普遍妥当な法則としてとらえられ、われわれ人間が対象の世界を支配しうるための合理的な手段、つまり技術をささえることができるようなものでなければならぬ。原理的に、そういう考え方が支配的であるといつてよいでしょう。……そういう形式合理的な思考原理がいまや文化の全面をおおいつくさんばかりの支配力を揮つており、そうした事態があらゆる現象からその固有の意味を奪いつつて、世界をますます無意味化させつつある。そのようにして世界のあらゆる現象がますます意味を失いつつあるということこそが、現代文化の重要な特徴だろう、と私は考えます。……こういう文化の中で生きていくことはそうとうな苦しみです。無意識の中にもみなもがき苦しんでいる。一方では、形式合理的な思考原理によつてもたらされる非常な効率の上昇と生活の豊かさから多くの恩恵をこうむり、それを享受しながらも、しかも他方では、来るところまで来た意味喪失の状況に苦しんでいるわけです」(大塚久雄『意味喪失の時代に生きる』日本基督教団出版局)。

大塚教授は、「だれもこの文化状況に満足していない。この世界から何とかして逃れ出ようと」しているが、どのような方法によつて逃げ出ようとしているかといえば、結局は、「力と感覚ということにならざるをえない」ようだと嘆いておられます。政治学者の憂いも、これに重なっているようです。すなわち、政治学者シェルドン・ウォーリン教授は、建国二百年を祝つた米国民主政の現状をみながら、次のように語りました(『アメリカにおける国家の観念』みすず書房『政治学批判』所収)。

「かつては」アメリカにおいては「国家」という言葉がしばしば権力乱用を意味する言葉として、「全体主義的独裁」というほぼ同じ意味で用いられることが多かった。」「したがって、アメリカの政治的伝統は、反国家的伝統であつたし、今日まで間断なくそうであると解釈されてきた。」「ところが：「今日では」『国家』という言葉がもはやいとわしい言葉ではなくなつてきている。」「民主政と結びついていの一連の政治的価値——不断の政治参加、代表に対するきびしい監視、政治権力の範囲や行使に対する厳格な制約——は、かつての牧歌的なアメリカでは意味があつたが、今日のような複雑で緊張した世界にあつてはむしろ危険である、といった形で説かれるのである。われわれが存続し

ていくためには、市民の役割を制限し、参加政治を官僚政治にかえ、討議機関を排除して階層的、管理的、エリート主義的組織を尊重することが必要であり、今日のような科学革命の時代にあつては、技術者こそ政治的人間の当然の継承者なのである、というわけである」。

「国家」は厭わしいものとして、あるいは独裁のイメージとして認識されてきたという指摘は、明治以来「国家」の強い枠組に縛りつけられて生きてきた、あるいは「国家」なくしては生きてこれなかった私たち日本人には、理解の及び難いものですが、今日「国家と民主政とのあいだの争い」(ウォーリン)において国家が優位を占め、それを是とする雰囲気が拡がっている状況は、私たちにも共通する憂いです。そのことを最も端的に表現し、そして醜態を演じたのが、中曽根元首相の「知的水準・人種差別発言」だったのではないかと、私には思えます。

中曽根首相(当時)は、「アメリカには、黒人とかプエルトリコとかメキシカンとか、そういうのが相当あって、平均的にみたら非常にまだ低い」と語り(一九八六・九・二二、自民党全国研修会)、米国各界から「人種差別だ」と非難を受けるや、中曽根首相は大いに慌てて「誤解だ、文脈全体をみてほしい」といいながらも「日本には少数民族と

いうものはいない、日本は単一民族だ」と述べて、さらに内外に失笑と怒りをかいました。雄弁と親米を誇る中曽根氏のこの失言は皮肉な失態でしたが、中曽根氏がみてほしいといった文脈は、どういうものだったのでしょうか。

「大事なことは、現代社会に適合するような独特の政治姿勢、あるいは政治の運営というものをもっていかなければ、だめです。現代社会に適合するとは、何であるか。それは、非常にリズムとテンポの速い社会です。昔のようにもったりもったりしているようなことをやったら、国民はついてこない。なぜならば、高度情報社会。そうして、日本は濃密激動社会です。……しかも、これだけハイテクあるいはマスメディアが発達して……日本人ぐらい情報がたつぷり、自然に見ていけば入ってくるという社会はない。……しかも日本は、これだけの高学歴社会になっておる。相当インテリジェントなソサエティになってきておる。アメリカなんかよりはるかにそうです。平均的からみたら。アメリカには、黒人とかプエルトリコとかメキシカンとか、そういうのが相当あって、平均的にみたら非常にまだ低い。そういう高密激動社会の高度情報社会の高学歴社会、だから……」(『中央公論』一九八六年十一月号)。

中曽根氏としては、現代の特質を素直に語ったもので

あつて、この指摘が謝罪にまでいたらざるをえなかったことには、おそらくはいまでも不満であらうと想像されます。効率を求め、それによって他を切り捨て、あるいは力や優秀さによってのみ人を量る風潮は、ひとり中曽根氏のみのことではないからです。現に、中曽根発言から二年後に、最高裁はそうした社会風潮がさらに求めているものは何かという答をはつきりと示してくれました。

中谷康子さんは自衛官であつた夫が不慮の事故で亡くなる不幸にあいましたが、みずからの信ずるキリスト教の信仰によって夫を追悼しながら生きてきました。しかし、この妻の強い反対にもかかわらず、国（自衛隊）は、靖国神社に神として夫を祀ってしまいました。やむなく彼女は、国を相手に憲法違反として訴えをおこしました。いわゆる「自衛官合祀拒否訴訟」ですが、一審・二審ともに「宗教上の人格権を国が侵害した違法行為」であると判断しました。この訴訟にあたつた今村嗣夫弁護士は「下級審のこれらの裁判官たちの判断は、ほとんどすべての新聞の社説をはじめ国民各層の間で高く評価された。哲学者久野収さんも「長生きしてよかった」との見出しのもとで「近ごろこんなスカッとした判決は珍しい。国家は少数者への寛容を持たねばならない」と述べていた」と報告しています（「こ

わされた小さな願い」キリスト新聞社）。

だが、最高裁は、その寛容の精神を見事に逆転させ、原告中谷さんの敗訴・国の勝訴としました。最高裁判決は、原告の訴えを心情として当然だとしながらも、「信教の自由の保障は、何人も自己の信仰と相容れない信仰をもつ者の信仰に基づく行為に対して、それが強制や不利益の付与を伴うことにより自己の信仰の自由を妨害するものではない限り、寛容であることを要請しているものというべきである」と断じたのです。法律家のわかりにくい文章をあえて下世話にくだいていいかえれば、こんな風になるのではないでしょうか。

「まあ、わかるけどねえ。だけど、特に何かひどい目にあつたり実際に損をしたわけではないのでしょう。まあ、心の中だけの問題ではないですか。それなら、世間さんには従つてもらわねばならんですよ。この程度の寛容さをもつていただく、これが世の中の約束ごとというもんですよ。」

私は驚きました。「寛容」という言葉がこのような形で使われる時代になつたとは！ 信仰の自由がどのような歴史を経てようやく現代に確立されつつあるのか、その歴史をみようとしなない判決であります。しかも、この乱暴さが、私たちの社会の契約の最後の保障の一つである最高裁

で行われたのであります。

私は最近、石田雄教授の『日本の政治と言葉』（上・下、東京大学出版会）を実に興味深く、また深く教えられて読みました。石田教授によれば「この本のねらいは『ことばの独裁』すなわち言葉の人間に対する支配から人間を解放するために、政治の世界における言葉の意味の変化に注目し、とりわけ政治権力による言葉の意図的操作という面よりは、それを受容する基礎ともなる言葉の意味の変化を歴史的・社会的文脈の中で分析する」ことにあります（傍点、引用者）。

そこで具体的に詳細に分析されているのは、自由・福祉・平和・国家の四つの言葉ですが、たとえば、「自由」について、明治初期の奔流の如き近代化の中で「葉から菓子や白粉の名前にまで『自由』ということが使われるような流行現象」を引き起こしながら、「何ら積極的な政治的效果は生まなかった」ことや、「敗戦後の政治課題として重視されたのは『民主主義』の言葉であって『自由』ではなかった」という分析を、私は、今日に引きのびしながら実に興味深く読んだのです。私たちの「国家と民主政のあいだの争い」の過程でなぜ、私たちが「自由で平等な人々の間で結ばれ、相互に義務づけあう契約を権力の根拠とする」（ハンナ・ア

レント）秩序をつくれず、国家の恣意に従わされつづけてきたのかを考え直してみたいという強い刺戟を、私は石田教授の研究によって与えられています。

七〇年代以降、わが国に拡がってきた政治心理は「現実主義」への傾斜と理念への嘲笑・挫折であるといえましよう。その拡がりには、かつてE・H・カーが第一次大戦後の平和から第二次大戦開戦にいたった「危機の二十年間」の変化を指して嘆いたように、「この社会において存在するものが理性と感性とによって支配されているのではなく、盲目的非理性的かつ悪魔的な実力によって支配されている」という考えに縛られ、「ユートピアのあらゆる要素を排斥する現実に急激に下降していった」ヨーロッパの心理を思わせるものがあります。その背景の一つとしては、くり返されてきたように、日本のめざましい経済成長と対照的に貧困の度を深める政治という奇妙な現実の中で改革への希望を失ったのだといわれますが、容易に希望を失い挫折に転ずる弱さは、日本近代化の底の浅さ——あるいは性急さ——にあることを、石田教授の分析を辿りながら、あらためて痛感させられたのです。

『現実主義』がその勢力を拡げてきたもう一つの背景は、「政治権力による言葉の意図的操作」というよりは、ジャー

ナリズムおよび知識人に対する権力の直接の操作であり、それは、「六〇年安保」に恐怖して「七〇年安保」に備えて準備されてきた結果であるともいふべきでしょう。この間の事情については、私が最も尊敬する政治記者、故後藤基夫さんの指摘があります（『戦後保守政治の軌跡』岩波書店）。そのように、いわば準備されてきた論者たちは、「一つの階層をなして」（後藤基夫氏）、また、ジャーナリズムの批判精神の衰退を安全弁として、七〇年代以降、期待にそむかず、戦後日本の諸改革を殆んど全面否定する発言を重ねてきたのです。最近、そのチャンピオンの一人は、「進歩主義とは人間の傲慢をひけらかす態度のこと」であり、「社会主義という地獄を産み落としたのは進歩主義であり民主主義である」と語っています。

進歩は退歩だという冷笑主義者のレトリックは、あるいは、マックス・ホルクハイマーとテオドル・アドルノの協同作業による名著『啓蒙の弁証法』（岩波書店）の進歩と啓蒙へのきびしい批判を下敷にしているのかもしれない。

「古来、進歩的思想という、もつとも広い意味での啓蒙が追求してきた目標は、人間から恐怖を除き、人間を支配者の地位につけることであつた。しかるに、あます所なく啓蒙された地表は、今、勝ち誇った凶徴に輝いている」と、

ホルクハイマーとアドルノは、この本を書き始めました。そして、合理的科学的批判によつてみずからの主体を形成し、他者のすべてを客体化して世界を支配するという進歩的思想が、結局は自己保存の神話に陥り、啓蒙の自己崩壊が生ずるのだと、近代の理性の営みを無惨なほどに根源的に告発します。

この本は一九三九年から四四年にかけて、フランクフルト学派の彼らがドイツを追われてフランスからアメリカに移る、その最も暗い時代に準備され執筆されたものだと思います。私は、そのあまりに強い理性への不信に同調できませんが、しかし、「啓蒙は、現代に奉仕して、大衆に対する全体的な欺瞞へと転身」し、「今日では文化がすべてに類似性という焼印を押す」という省察は、まさに現代文化の危険を最も鋭く指摘するものであります。

わが国における冷笑主義者たちが、最も暗い時代に最も重いものを背負ったわけではなく、改革のためにみずからの労苦を捧げたものでもないばかりか、中には、中曽根元首相の選挙応援にかけつける類いのものもある以上は、彼らの発言をホルクハイマー／アドルノの作業と重ねてとりあげることとは到底なしえないことですが、しかし、それにもかかわらず、それらの冷笑的な現実主義が今日の思潮の

中に拡がつてゆくことを無視することはできません。彼らとしても、「近代」がつくり出してきた矛盾と不安定と失望の間隙を衝いて意味ありげな発言を重ねているからです。

「近代」および「ポストモダン」の問い直しは、哲学と文学その他の表現の世界においていち早く行われ、さらにやかな、また難解な言葉とともにわが国に紹介・導入されてきましたが、その作業は、今日、「国家」の問い直しへと発展してきています。二〇世紀の国家は「一方での広域化・世界国家化の傾向と、他方での極小国家化・市民社会による吸収の傾向とに、不断に挟撃されているのであり、国家というかたちでの人類の政治的共同のありかたが永続不可侵のものであるか否かという問題が、問題として提起される歴史的段階に、さしかかっている」という認識があります（加藤哲郎「国民国家から世界国家へ」、田中浩編『現代世界と国民国家の将来』御茶の水書房、所収）。

生アレバ必ズ死アリ、です。近代国家の終わりも、政治学者がかねて指摘してきたところであり、また、この二、三十年、世界の各地で起こり続けられている国家をめぐる紛争をみるならば、誰もが実感できるものでありますが、昨年以来のソ連・中国・東欧の現実、近代国家にとって「歴史的段階」が訪れていることを知らされます。また、

環境問題においてはすでに一九六〇年代後半からみえてくるように、多くの重要課題が国境を越えた課題となり、あるいは国家の枠においては解決できない課題となりつつあります。

近代国民国家は、そのモデルとされるアメリカの独立（一七七六年）およびフランス革命（一七八九年）から数えれば二百年余の転換のとき——日本でいえば一八六八年の明治維新から一二〇年余の——でありますが、さらに「近代国民国家の確立に向ってその第一歩を踏み出すことを示す狼煙であったといえる」（田中浩『ホッブズ研究序説』御茶の水書房）ホッブズの『リヴァイアサン』の刊行（一六五一年）に遡れば、三世紀半にわたる時代を問い直す作業に、人類は当面しているのであります。

地球社会の危機——その諸相

第二次大戦後の四五年、二〇世紀の百年、そして三世紀以上にわたる近代という三つの時代が層を重ねて問い直されている、その転換の意味は、以上のように乱暴なスケッチをしただけでも、まことに深刻であることを再確認させられるのですが、その転換の舞台、即ち、地球自体がきわめて危機的な状況にあり、その危機が進んでいることを、

今日では誰もが知っております。

昨年、私は小学校六年生に「私の地球」と題して思いのままに二冊の雑誌をつくってもらい、それをめぐって話しかうという体験をもちましたが、そのとき、肯きもし、また驚きもしたのは、クラス全員の子どもたちが地球の将来に危機感をもち悲観していることでした（NHK『授業』一九八九・九・二五）。実際、地球の危機を伝える警告の指標や事実は、私たちの日常に溢れています。

私にとって地球の危機を告げてくれた最初の声は、レーチェル・カーソンの『沈黙の春』でした。シュヴァイツァーに惹かれ、子供の頃から野や森で過ごすことが好きだったという彼女は、発生遺伝学と海洋生物学の専門家となりまた著述家となりましたが、一九六一年に『ニューヨーク』に農薬と殺虫剤の乱用——即ち、効率的に自然の制圧を求める人間の行いが何をもたらすかを告発いたしました。翌年、一冊の書物として刊行され（Silent Spring）、日本では一九六四年に紹介されました（新潮社）が、その年に彼女は亡くなりました。彼女は、このような言葉を遺してくれました。

「あるとき、自然は沈黙した。……病める世界——新しい生命の誕生を告げる声もはやきかれない。でも、魔法に

かけられたのでも、敵に襲われたわけでもない。すべては、人間がみずからまねいた禍だったのだ」

彼女は、この本を「アルベルト・シュヴァイツァーに捧ぐ」という献辞を書き、シュヴァイツァーの言葉を引用しています。「未来を見る目を失い、現実には先んずるすべを忘れた人間。そのゆきつく先は、自然の破壊だ」。

レーチェル・カーソンの静かな口調の、しかし誰もが衝撃を避けられない強い警告が発せられたのは三十年前ですが、それから丁度十年後に、イタリアのすぐれた実業家、アウレリオ・ペッチェイ氏を中心とするローマ・クラブが『成長の限界』（日本訳、ダイヤモンド社）を報告しました。のちにペッチェイ氏は、日本の記者に「『成長の限界』は百年にわたる人類への警鐘として提起したつもりだったが、これがわずか十年後に現実のものとなるとは……」と嘆いております（『読売』一九八一・二・五）。ペッチェイ氏は、惜しくも八四年に亡くなりました。しかし、この頃から、事態の急迫にもよりますが、環境問題への関心と認識は世界に共通のものとなってきました。この間、最もめざましい、先駆的な役割を果たしてきた一つは、レスター・ブラウン氏を中心とするアメリカの民間シンクタンク「World Watch Institute」——世界を見守る研究所とも訳しま

しょうか——の活動と報告書であります。

その年次報告書は、毎年一二〇カ国以上の国で翻訳刊行されております（日本では、初めは福武書店、いまはダイヤモンド社）。そのウォッチする問題は、環境・資源・人口・食糧・エネルギーから、エイズ・軍縮・国際協調……へときわめて広範囲にわたりますが、数年前から力を入れてきたのが、エネルギーの消費と人口の増加、森林の縮小等による地球の温暖化と、フロンガス排出によるオゾン層の希薄化でした。

大気中のオゾン層が極度に薄くなっているために皮膚がんが増しており、人間の免疫組織が破壊されつつあるために病気になった時に治らなくなっている、という警告をワールド・ウォッチ研究所は四、五年前から行ってきましたが、今日では先進国サミットでも重要課題としてとりあげられるところまできました。勿論、その対策と成否は、これからのことです。

また、エネルギーが大量に消費されて二酸化炭素などの放出が増し、一方、二酸化炭素を吸収する森林が大量に伐採され消滅しつつあるために、二酸化炭素が厚い層をなして地球全体が温室の中にあるように、太陽の光を通し熱を逃さないようになっていく。このために地球の温度が上昇

している——ということです。地球の温暖化は、農業と海水面に最も大きな影響を与えますが、レスター・ブラウン氏は、海洋の温度が一度Cあがると海水面は六〇センチ持ちあがる。最近の研究にもとづいて西暦二二〇〇年までの最も悪いケースを想定すると、世界全体の水面は二・一七メートルあがる。バングラデシュの場合には、二・三メートル地盤沈下も進み、合わせると四・四七メートル水面があがることになり、このためにバングラデシュの居住地の三四％が損失し、人口の三五％が移住しなければならぬ——このような推測と警告を行っております。

一九八六年にオランダ政府はシェルト川のデルタ地帯の堤防を高くしたそうですが、この工事費は二四億ドルです。レスター・ブラウン氏はこのことを紹介しながら、「バングラデシュははたしてこのために金を使うことができるだろうか」と疑問を呈しています。たしかに、バングラデシュは世界の最貧国の一つとされております。

また、一九八七年秋の国連総会で行われたモルジブ共和国のアブドゥル・ゲヨム大統領の演説にも言及しています。モルジブ（マルディブともいう）はインド洋上の一九六の島々からなっている、人口一五万の国ですが、その島の多くは海拔二メートルの位置にあり、一メートルでも

海水面が上昇すれば、台風が来た場合には、この国が生き残るのは難しいということを、ゲヨーム大統領は報告し、みずからの国を「絶滅に瀕している国家」だと呼びました。そして、「わが国にふりかかっているこの災難は、みずからがつくり出したものでもない。また、みずからの力で防ぎうるものでもない」と悲痛な訴えを行っています。これは、モルジブにとどまらず、太平洋の中には同じ不安を抱えている国は少なくないはずです。

化学燃料によって放出される二酸化炭素レベルを引きあげているのは、主として米国とソ連、次いで中国だとされていますが、森林を消滅させて自然のバランスを崩していることに多くの責任をもっているのは、猛烈な勢いで資源を消費し、また生きるのに精一杯の貧しい資源国に天然資源を喰いつぶしながら開発を進める経済発展モデルを押つけてきた日本でありましょう。こうした経済・社会構造を転換するのは、よほどの転換でなければならないはずです。たとえば、工業化の最も有力な、そして地球環境を脅かす最も悪い指標の一つといえる自動車を例にとってみましょう。今日、四億台の車が世界の道路にひしめきあっているそうです（『ワールド・ウォッチ地球白書89〜90』ダイヤモンド社）。一九五〇年に世界に存在した自動車は五三〇

万台、うち四〇〇万台が米国でした。一九八六年には三億八千六百万台に増し、米国では一億三千五百万台になっています。現在、中国では八〇万台、一三七四人に一台の割合、日本では二千九百万台、四・二人に一台ですが、私たちは、いまは世界全体の〇・五パーセントしか車を持っていない中国とインド——その人口の和は世界の三八パーセントです——に、君たちはクルマ社会をつくらなくてくれ、といえましょうか。しかし、中国・インドがクルマ社会になったときに、地球の環境問題はどのようなインパクトを受けるでしょうか。

人口問題も、次第に危機の様相を深めています。人口増、とりわけ開発途上国での人口急増が、貧困と食糧問題の悪化や途上国間の紛争の頻発を予測させるだけでなく、国連人口活動基金は最近発表した『世界人口白書』（一九九〇・五・一四）では、地球環境問題と人口の相互関係を重視してもいます。

現在の世界の人口は五三億であります。一九六〇年には三〇億、七四年に四〇億、八七年に五〇億をこえ、九九年には六四億と予測されています。このうち、途上国の人口は、一九七五年には三〇億でしたが、昨年六月には四〇億をこえました。予測されていたよりは一年早いスピードで

あり、このままでいけば二〇〇〇年には四〇億になり、二〇二五年には、全体で八二億、途上国で六八億、と推測されています。それでは、世界の人口はどれほどまで増えてどのあたりでとどまるだろうか——即ち、静止人口の予測ですが、これについては、来世紀末に一〇二億で落ち着くだろうと右の『白書』は語っています。

『ワールド・ウォッチ地球白書』87年版によれば、日本の静止人口は一億二八〇〇万(現在は一億三四五万)、米国は二億八九〇〇万とみていますが、中国は一〇億五〇〇万(一九八六年、以下同じ)から一五億七〇〇〇万に、インドネシアは一億六八〇〇万から三億六八〇〇万に、バンドラデシユは一億四〇〇万から三億一〇〇〇万に、インドは七億八五〇〇万から一七億に達して静止するだろうといえます。これらの国の現状をみながら考えれば、まことに大変な課題であります。

地球社会は、このほぼ正確な予測に備えてかなりのことをしなければならぬはずですが、現状をみれば、果して未来への準備まで及びうるのか、まことに暗いものがあります。例えば、一九七九年―八一年と一九八六年―八七年の間の一人あたりの穀物生産は、五一の途上国で減少し、増加したのは四三方国であったために、極度の栄養不足の

状態にある人口は四億四〇〇万人から五億一二〇〇万に増え、今世紀末には五億三二〇〇万人をこえようといわれています(『世界人口白書』)。

ユニセフ(国連児童基金)の『九〇年世界子供白書』は「発展途上国が支出の多くを債務返済や軍事費にむけるために、毎日二万一千人の子供が死んでいる」と報告しています。ユニセフが初めて『子供白書』を出したのは一九八〇年ですが、毎年の白書は事態が改善されていないことを示すばかりです。ユニセフ駐日代表のポール・イグナチエフ氏は、次のように語っています。「ひとつかみの塩とひとにぎりの砂糖を混ぜあわせ、それを水に溶かして飲ませるだけで下痢による脱水症に苦しむ子供らを救えることを、七〇年代の初めにカンボジアで知った。これに栄養素などを加えて科学的につくったORS(経口補水塩)」と呼ばれる粉末を、イギリスの権威ある医学雑誌『ランセット』は、世界最大の医学的発見だとよんでいるほどだ。このORSをできるだけ多くのひとに使ってもらうよう努力している」(『チルドレンズ・ライツ』日本評論社、引用は要旨)。そのORSは一袋一〇セント、予防接種のワクチンは一・五ドル、それらが途上国の子供たちにゆきわたるための経費は年間二五億ドルだと、ユニセフはいっています。

十年前に国連は、「一九九〇年までに、すべての人々に、安全な水と衛生施設を」というスローガンを掲げて「飲料水の供給と衛生の十年」というキャンペーンをはじめました。そのとき、国連は「世界で二〇億の人々、途上国の人口の五分の三が、容易に安全な水を得られないで苦しんでおり、それによって、年に二千五百万人もの命が失われている」といい、同時に、世界はいま軍事費を年に五千百億ドルも費っているが、その三週間分を「水の十年」のために転用できれば、一九九〇年までの目標が実現されるかもしれない、と訴えました。今年は、そのキャンペーンのゴールの年ですが、成果は、如何だったのでしょうか。この間に世界の軍事費は倍増していることだけを、私は知っております。

「高慢にも人間は……」

人類の行動がこれほど多元化している中で、これほど深刻に、根源的に人間の生活と行動のシステムが問われていることは、かつてなかったと言っても言い過ぎにならないと思います。まさに、危機的な転換の時代であります。このような形でシステムが問われているというのは、いうまでもなく、システムのオータナティブ（代案、選択肢）だ

けではなく、システムを選ぶ人間の価値観と、その価値観を身につけている人間性そのものが問われていることを示しています。

さらに、今日の科学技術の新しい、かつ巨大な可能性は、その人間性を最もよく問うものであります。現代は科学技術革命の時代だといわれています。コンピューター科学と遺伝子工学に先駆的に示されているように、科学技術の可能性は全く新しいレベルに置き直され、かつてない可能性を見ると同時に、そのことによって人間性がかつてなく直接に、衝かれるように問われています。人間にとって初めての体験の道に踏み入ろうとしているのだと、私には思えます。

たとえば、コンピューター科学のおそるべき発展は、「永遠の過渡期」とでもいうべく、日々、技術の改善・発明を重ね、新しい世界に私たちを導いてくれています。二〇二〇年〜三〇年頃には人間と同じような感受性をもち人間と自由に対話ができる新しい世代のコンピューター（ロボット）の製作（誕生？）が可能になろうと、専門家たちは語っているようです。これを聞けば、科学においてはフィクションとノン・フィクションの領域が見えないように交錯しあう時代に、その入口に私たちが入っているのであり、

夢のような可能性を現実化しうる時代に足を踏み入れつつあるのだと、私のような門外漢にも思われます。しかし、そのとき、最も問われるのは、人間の感受性であり、人間の理性であり、人間の力ではないでしょうか。その感受性と理性と力は、私たちの社会において如何に再生産され、あるいは武装されているといえるのでしょうか。

一九五〇年代にその存在を発見された遺伝子は、七〇年代に入っていよいよその姿が正確にみられるようになり、科学者たちは遺伝子を切り、つなぎ、さまざまに操作して新しい遺伝子を人為的につくり出すことに成功しました。

かくして、七〇年代の終わりに、人類は「神の手」をもった、といわれるようになりました。これにも関わって、イン・ビトロ妊娠——試験管の中で人間の卵子と精子を使って受精させることに、医学は成功し、これによって、試験管の中で受精した卵子をウシの胎内に移植して九ヵ月後に手術によって、育った子をとりに出すことができる、そのような可能性を人間が求めれば可能になるという域に人類は入ってきたといわれます（ナイジェル・コールダー『1984 and after』岩波書店）。

人間がこの方法を選ぶとは、思えません。しかし、将来において絶対に選ばないと、いえるのでしょうか。選ばな

かったとするなら、なぜ、そうなのでしょう。また、選んだとすれば、そのとき、親と子のつながり、人間の生命観、人間のモラル、それらはどのようなものになるのでしょうか。

最近わが国でもつよい関心がもたれ、政府と大学がそれぞれに研究、検討をはじめた問題に、脳死問題があります。人間はどの状況において死を宣告されるべきか、という問題を人間が決めようというのです。この是非について、私には全く答はありません。

唯、一つの想像をすることはできます。——すぐれた技術をもち職業意識に積極的な医師であれば、目の前のわが患者を何としても救いたいと希い、最大限の努力を払うでしょう。もし、患者の心臓や肝臓などの内臓をとりかえることができれば、それによって患者を再びその人を持つ仕事や家族にかえしてあげることができるとすれば、——その確実な成功のためには、新鮮な臓器が必要であり、それには臓器提供者ができるだけ早く死んでもらいたいと思うでしょう。あるいは、無意識のうちにそう思うでしょう。それが、直接に生命を救い得る崇高な使命をもった医師の、当然に希うことであります。

しかし、人間の死は、誰が判定するものなのでしょうか。こ

れまで私たちは、生と死の境界を決める最後の力は神の意思か自然の摂理であると、それらに一切をゆだねてきました。その入ったことのない領域に、人間は入ろうとしているのでしょうか。心臓の停止から脳死へ、その次は何が死の判断の基準として求められるのでしょうか。

七〇年代の終わりには人間は神の手をもった、そして、八〇年代の終わりに人間は神の判断の中に入りこもうとしている——しかし、人間の心は神の心になりえますか。なりうるとしても、人間は考えてゆくのでしょうか。

再び、バーツラフ・ハベル氏のスピーチに耳を傾けてみたいと思います。

《この世界、とりわけヨーロッパは、西暦で二度目の千年の終りを迎えて、特別の岐路に立たされています。……世界が今日直面せねばならぬ主だった危険のすべて、核戦争から生態系の破局を経て社会文明の破滅にいたるまで、どこかそれらの内部に、ある共通の原因が隠されたままになっ

ていることを証明するのは、難しいことではありません。それは、もとは卑屈だった言葉が、気づかれずに高慢な言葉に変わったのです。

高慢にも人間は、被造物の頂点に立つ主として、自然を

完全に理解し、自然を意のままになしうると信じ始めました。

高慢にも人間は、知力の所有者として、自分自身の歴史を完全に理解し、その後すべての人々に幸福な生活を計画してやる能力があると信じ始めました。……より良き未来のための唯一の正しい鍵を発見したと、信じ始めたのです。

高慢にも人間は、原子核の分裂ができると、自分はまだ完璧なのだから、核軍備の危険からも核戦争の危険からも脅かされることはない

と信じ始めました。これらのどの場合にも、人間は決定的に誤りをおかしたのです。これは悪い。しかしこれらのどの場合でも、人間は自らの誤りを理解し始めています。これは良いことです。これらすべてを教訓として、私たちはだれもがいつしよになつて、高慢な言辞と戦わねばならず、見かけは卑屈な言辞の中のいかわしい高慢さを注意深く捜さなければなりません。……これは本質的に、道德の問題なのです。》(傍点、引用者)

私たちが今日当面しているのは、千年、二千年という大きな時間の幅をもった、大きな裾野をもった転換の時代なのだと、ハベル氏はいうのです。そして、その転換の時代

が私たちに問うているものの本質は、道徳——私たちひとりひとりの主体、その生き方、その感受性と理性だと、彼は強調するのです。私は、二千五百年前に生きた孔子がのこした『論語』を思いかえします。その全篇の最後の章、その最後の言葉は、『不知言、無以知人也』であります。言を知らざれば、以って人を知るなきなり——「言語こそは人格の表現である。言語の認識によってこそ、個人も人間の運命も、認識される」の意であります（『論語』吉川幸次郎監修、朝日文庫）。

この『論語』の中で最もしばしば現われる主題は「仁」という言葉ですが、その「仁」とは何を指すのか、という問に対して、吉川幸次郎先生は「おそらくそれは、人間の愛情を基礎とする道徳を、そう定義するだけではなお十分であつて、そうした愛情の道徳を実行する意力、そういう風に定義するのが正しいであろう」と答えておられます（同右、傍点、引用者）。

清末の社会変革運動を担った思想家、譚嗣同は、人間の存在と天の大原を詳しく究めることなくしては、禍の淵源と社会の束縛の由来を明らかにできない、として『仁学』（西順蔵・坂元ひろ子訳注、岩波文庫）を著わしました。譚嗣同は、西太后派によつて捕えられ「大逆不道」の罪で

処刑されましたが、二三歳という若さで逝つた譚嗣同を同時代の思想家は「万丈の光芒をはい一瞬にして飛び去つた彗星」といい、若き日の毛沢東らは「譚嗣同の英霊が宇宙に満ち、二度と死滅すべくもない」と慕つたといわれます（坂元ひろ子氏）。

その『仁学』『自序』冒頭をへ「仁」は「二」と「人」でできていて、人と人との関係という意味である。「元」は「二」と「儿」でできており、「儿」は人の字の古体であつて、これも「仁」である」と譚嗣同は書きおこしました。

道義、あるいはヒューマニズム、吉川先生の言葉を借りれば、人間の愛情を基礎とする道徳を実行する意力と、ことがらの根源あるいは元初に遡つての問題の本質も、ふたつながらに人と人との関わりによつて成り立つているという譚嗣同の簡潔な言葉に、私はつよく惹かれます。

私に残された時間は、それほど多くはないと思います。しかも、いまようやく勉強を始めたような思いがあります。しかし、そのことにこだわらず、あるいはそれを悔いず、さまざまな本、とりわけて古典を読み、多くのことを教えられております。深刻な、しかし壮大な転換の時代の歯車の音が、私のような者をして、そのようにさせるのだと思われまふ。

〔付〕安江良介が選んだ一〇〇冊の本

戦後思想論 吉田傑俊 (青木書店)

現代史におけるグラムシ 竹村英輔 (青木書店)

認識論 戸坂潤 (青木書店)

科学論 戸坂潤 (青木書店)

一文芸私抄 水上勉 (朝日出版社)

岡倉天心 大岡信 (朝日新聞社)

論語 吉川幸次郎 上・中・下 (文庫) (朝日新聞社)

フィリピン・ナシヨナリズム論 上・下

レナト・コンスタンティーン (井村文化事業社)

オリープの森で語りあう エンデ他 (岩波書店)

シュミット外交回想録 上・下 (岩波書店)

ヒロシマ・ノート (新書) 大江健三郎 (岩波書店)

孫子 (文庫) (岩波書店)

日暮砦 (文庫) (岩波書店)

カジノ資本主義 スーザン・ストレンジ (岩波書店)

平和のハトとリヴァイアサン 宮田光雄 (岩波書店)

戦後保守政治の軌跡 後藤基夫他 (岩波書店)

啓蒙の弁証法 ホルクハイマー／アドルノ (岩波書店)

1984 and after ナイジェル・コールダー (岩波書店)

仁学 西順蔵ほか訳注 (文庫) (岩波書店)

百鬼園先生と目白三平 (文庫) 中村武志 (旺文社)

南ア・アパルトヘイト共和国 吉田ルイ子 (大月書店)

経済危機とアメリカ社会 オコンナー (御茶の水書房)

軍事化から非軍事化へ グレン・フック (御茶の水書房)

民族文化運動の状況と論理 白樂晴 (御茶の水書房)

ローザ・ルクセンブルグ フレーリヒ (御茶の水書房)

ホップス研究序説 田中浩 (御茶の水書房)

さよならブラジル ルイス・ブントル (花伝社)

哲学者アリストテレス ジョン・アクリル (紀伊國屋書店)

想起と和解 ヴァイツゼッカー (教文館)

こわされた小さな願い 中谷康子 (キリスト新聞社)

わが異端の昭和史 石堂清倫 (勁草書房)

鐘鳴りわたれ 小田成光 (勁草書房)

こころ暦 千代芳子 (講談社)

シェークスピア 全8巻 木下順二訳 (講談社)

反骨―鈴木東民の生涯 鎌田慧 (講談社)

日本の禍機〔学術文庫〕 朝河貫一（講談社）

マホメット〔学術文庫〕 井筒俊彦（講談社）

ルソー〔人類の知的遺産〕 福田歓一（講談社）

永訣かくのごとくに候 大岡信（弘文堂）

木を植えた人 ジオノ（こぐま社）

飽食日本 陸培春（サイマル出版会）

ベスト・アンド・ブライテスト ハルバースタム

（サイマル出版会）

朝鮮の歴史 朝鮮史研究会編（三省堂）

新世代の国家像―明治における欧化と国粹 パイル（社会

思想社）

朝を見ることなく〔教養文庫〕（社会思想社）

歴史の研究 1・2・3 トインビー（社会思想社）

日本弁護士列伝 森長英三郎（社会思想社）

オゾン戦争 1・2 ドット／シクフ（社会思想社）

ラムネーの思想と生涯 ルイ・ル・ギュー（春秋社）

モスクワの冬 ベンヤミン（晶文社）

脱病院化社会 イリツチ（晶文社）

発言 久野収（晶文社）

さよなら日本 宇佐美承（晶文社）

現代に生きる思想 池明観（新教出版社）

ボンヘッファー獄中書簡 ベートケ（新教出版社）

桐生悠々反軍論集（新泉社）

柳田国男文化論集（新泉社）

旧約聖書物語 犬養道子（新潮社）

新約聖書物語 犬養道子（新潮社）

文車日記 田辺聖子（新潮社）

とくと我を見たまえ 山口玲子（新潮社）

沈黙の春―生と死の妙薬 レーチェル・カーソン（新潮

社）

教室から消えた先生 古在由重（新日本出版社）

はんなり ほっこり 寿岳章子（新日本出版社）

ブーシキン〔新日本新書〕 草鹿外吉（新日本出版社）

憂国の詩―鉄幹と晶子 永畑道子（新評論）

評伝ユング I・II ハナー（人文書院）

フロイトと後継者たち 上・下 ローゼン（誠信書房）

儒教と道教 マックス・ウェーバー（創文社）

宗教社会学 マックス・ウェーバー（創文社）

明治・思想の実際 坂野潤治（創文社）

国家の神話 カッシーラー（創文社）

スポーツの現代史 川本信正（大修館）

経済学の歴史 J・K・ガルブレイス（ダイヤモンド社）

成長の限界 ローマ・クラブ（ダイヤモンド社）
ワイルド・ウォッチ地球白書 89、90（ダイヤモンド社）
中国詩史 上・下 吉川幸次郎（筑摩書房）
朝鮮を想う 柳宗悦（筑摩書房）
神軍・緑軍・赤軍 山内昌之（筑摩書房）
失われた時代 長田弘（筑摩書房）
竹内好評論集 全3巻（筑摩書房）
高橋是清自伝 上・下〔文庫〕（中央公論社）
人間の条件 ハンナ・アーレント〔文庫〕（中央公論社）
自由からの逃走 E・フロム（東京創元社）
権力と人間 ラスウェル（東京創元社）
聞き書 南原繁回顧録 丸山真男・福田歓一（東京大学出版会）
木戸幸一日記 上・下（東京大学出版会）
日本政治史 1、4 升味準之輔（東京大学出版会）
井上毅と明治国家 坂井雄吉（東京大学出版会）
日本の政治と言葉 上・下 石田雄（東京大学出版会）
日本政治史 1、4 信夫清三郎（南窓社）
意味喪失の時代に生きる 大塚久雄（日本基督教団出版局）
ともに生きる 武者小路公秀・長州一二（日本評論社）
人間の顔をした国際学 久保田淳遺稿集（日本評論社）

戦前戦中を歩む 美作太郎（日本評論社）
チルドレンズ・ライツ（日本評論社）
九〇年代世界はどう動く M・フェルドスタイン（日本放送出版協会）
なんでアムネスティ？ 阪本和子（農山漁村文化協会）
西欧政治思想史 全5巻 S・ウォーリン（福村出版）
アメリカ政治史 有賀貞（福村出版）
翔ぶがごとく〔文春文庫〕1、10 司馬遼太郎（文芸春秋）
西洋思想大事典〔全5巻〕（平凡社）
ルネサンスのマドンナたち サルヴァデオ（平凡社）
朝鮮独立運動の血史 I・II 朴殷植（平凡社）
中国古典文学大系「史記」上・中・下（平凡社）
ドイツ零年 モラン（法政大学出版局）
伝統と啓蒙 成瀬治（法政大学出版局）
賀茂川のほとりで 岡部伊都子（毎日新聞社）
労農派の昭和史―大森義吉の生涯 大森映（三樹書房）
戦中と戦後の間 丸山真男（みすず書房）
学問とジャーナリズムの間 杉山光信（みすず書房）
全体主義の起原 1・2・3 アーレント（みすず書房）
チャップリンの仕事 江藤文夫（みすず書房）
政治と精神医学 ブロック／レダウエイ（みすず書房）

われらの生涯のなかの中国 岡崎嘉平太ほか(みすず書房)

政治学批判 シェルドン・ウォーリン(みすず書房)

哲学的・政治的プロフィール 上・下

J・ハーバーマス(未来社)

長谷川如是閑研究序説 田中浩(未来社)

現代政治の思想と行動 丸山真男(未来社)

今の女 磯村春子(雄山閣)

事典 昭和戦前期の日本 百瀬孝(吉川弘文館)

山路愛山(人物叢書) 坂本多加雄(吉川弘文館)

現代の政治意識 上・下 ヤスバース(理想社)

寄留者の歌 中藺英助(リポート)

昭和天皇 115 田中伸尚(緑風出版)

戦後文学を読む 伊藤成彦(論創社)

目白三平随筆 正・続 中村武志(論創社)

人文会会員名簿

(〒111 台東区蔵前 2-6-4 筑摩書房内)

1990. 9. 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	FAX
	青 木 書 店	古川 清	101	千代田区神田神保町 1-60	292-0481	292-0475
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	平石 修	113	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
	紀伊國屋書店	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘 5-38-1	439-0128	439-3955
	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	814-6861	814-6854
	社会思想社	渡辺 和彦	113	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷 3 丁目ビル	813-8105	813-9061
幹 事	春 秋 社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田 2-18-6	255-9611	253-1384
幹 事	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田 2-1-12	255-4501	255-4506
	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚 3-20-6	946-5666	945-8880
代表幹事	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	269-1051	269-1092
	筑 摩 書 房	菊池 明郎	111	台東区蔵前 2-6-4	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	竹内 康一	113	文京区本郷 7-3-1		
				東京大学構内	811-8814	812-6958
幹 事	日 本 評 論 社	菅田 誠	170	豊島区南大塚 3-10-10	987-8621	987-8590
幹 事	福 村 出 版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	813-3981	818-2786
	平 凡 社	須田 康昭	102	千代田区三番町 5 Kビル	265-0455	263-9333
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見 2-17-1		
				法政大学構内	237-1731	237-8899
会 長	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷 5-32-21	814-0131	818-6435
	"	持谷 寿夫		"	814-0131	818-6435
幹 事	未 来 社	西谷 能英	112	文京区小石川 3-7-2	814-5521	814-8600
幹 事	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見 2-6-9	262-3231	262-6938
	有 斐 閣	辻村 清隆	101	千代田区神田神保町 2-17	265-6811	262-8035
	吉 川 弘 文 館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	813-9151	812-3544

販売企画委員会 ◎辻村 ○重光 古川 氏家 竹内 阿部
 弘 報 委 員 会 ◎土屋 ○平石 原田 佐久間 西谷
 調査・研修委員会 ◎濱地 ○澤畑 渡辺 菅田
 特約店委員会 ◎萬洲 ○市川 持谷

伊藤克敏
こどものことば
習得と創造 発達心理言語学から
誤用に着目して解明。2472円〒260

細川周平
レコードの美学
エジソンから先端テクノロジーに
よるレコードまで。3914円〒310

米田利昭
わたしの漱石
道義、物語、小説の視点から漱石
文学の真髄を読む。2678円〒310

関 雅美
ポパーの科学論と社会論
社会論に重点を置いたく批判的合理主義への手引。2678円〒310
* 定価は消費税込みです。

東京文京 後楽2-23 **勁草書房** 振替東京 5-175253

新 刊 案 内

聞き書き花岡事件

野添憲治著 ¥1854
太平洋戦争・中国人強制連行・一斉蜂起・大量虐殺……秋田県の小さな寒村で起きた歴史的な事件の意味を新たに発見された資料と証言で綴る復刊

アフリカの価値観

一無文字社会の伝統思想と日本の教育—
細見眞也著 ¥2884
アフリカ諸国の近代化と教育政策を日本の近代化との比較で分析する

□重版絶賛発売中□

ブラジル民衆本の世界

—コルデルにみる詩と歌の伝承—
J・ルイテン/中牧弘允他訳 ¥4738

御茶の水書房

〒113 東京都文京区本郷5-30-20
☎03(5684)0751/振替東京8-14774

テレビ朝日系「木曜ドラマ」原作本
10月18日(木)夜9時・五週連続放映!!
東京湾ブルース
「死の海」と呼ばれ、開発、埋め立てが進む、東京湾を舞台に、いまなお昔どおりの漁法にこだわり続ける頑固な兄と弟……。自然と人間への打算のない愛を描いた、この秋、話題のテレビ・ドラマ!!
■出演/緒形直人、国生さゆり、牧瀬里穂、大地康雄
かたせ梨乃、小林亜星ほか ■監督・脚本/黒土三男
黒土三男著 (「とんぼ」「うさぎの休日」で向田邦子賞受賞)

沢野ひとし=装画
小B6判・定価1200円(税込)

社会思想社

東京都文京区本郷3-25 Tel. 03-813-8105

差異の世界 クール・女性

バーバラ・ジョンソン/大橋洋一,他訳
脱構築批評を現実世界に展開させ、新たな地平をひらく ■2900円(税込)

グリム童話の 悪い少女と勇敢な少年

ポティックハイマー/鈴木晶,他訳
誰もが知っている童話の中の意外な真実を明るみに出す ■2900円(税込)

幸福の約束 イギリス児童文学の伝統

イングリッド/中村ちよ,北條文緒訳
子どもに幸福を約束し続けた児童文学の系譜を辿る力作 ■5150円(税込)

シェイクスピアの 言語を考える

N. プレイク/森祐希子訳 様々な面からその言語を考察し、作品への深い理解を手助けする ■3400円(税込)

紀伊國屋書店

出版部: 東京都世田谷区桜丘5-38-1
ご注文は ☎ 03(439)0128へ

ラカンと 洞察の冒険

現代文化における精神分析

S. フェルマン／森泉弘次訳 難解
とされるラカンの思想を有効性のあ
る実践思想として解放した。2680円

サイコシンセシス叢書2

無条件の 愛とゆるし

E. スタウファー／国谷誠朗・平松
園枝訳 人生に転換をもたらし、肯定
的な生活を送るための技法。2300円

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6
TEL. 03-946-5666

ワイル博士の ナチユラル・メデイスン

●A・ワイル／上野圭二訳 伝承医療の智慧と現代医
学の成果を統合、現代病を防ぎ真のウェルネスを達
成するための方策を詳述。21世紀の医典。二九〇〇円

●M・マッカチョン／片山陽子訳 誰も知らなかった
人のからだの秘密。からだにまつわる様々な知られ
ざる事実を一挙公開。格好の話の種本。一五五〇円

▶ 定価は消費税込み

東京都千代田区 春秋社 (03)255-9611
外神田2-18-6 振替東京8-24861

ボーダーラインの 心の病理

◎町沢静夫

現代社会の精神病理を“境界例”
から捉える画期的な書。1800円

悩みのチェック90

◎人見一彦

登校拒否、アルコール依存症など、
各年齢層の具体的症例。1300円

内なる治療力

◎S・ロック D・コリガン

精神神経免疫学を紹介し、東洋医
学との統合性を探る。2400円

大阪市北区西 創元社 東京都新宿区
天満1-4-2 山吹町334-11

ルネサンス劇場の 誕生

《演劇の図像学》

G・R・カーノードル 佐藤正紀訳
演劇に内包された豊饒な視覚芸術の伝
統を解き明して、演劇研究に新地平を
開いた古典的大著。9800円

展望

久野収 21世紀に向けて、日本人は何
を考えるべきか。ポスト冷戦時代の新
しい生き方を指し示す、市民哲学者の
発言集。浅田彰、小田実、島田雅彦、
山本哲士氏との対談を収録。1700円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12
電話 (255)4501

日本評論社

岐路に立つペレストロイカ

——社会主義再生のための分析と構想
ボリス・クラシヴィリ／著 2800円

朝鮮が統一する日

——ベルリンの壁から38度線へ
河 信基／著 1400円

まんがアパルトヘイトの歴史

日本ユネスコ協会連盟・
くぼたのぞみ／編訳 950円

内申書を考える

今橋盛勝ほか／編 1600円

フェミニズムって何だろう

広渡清吾ほか／編 1600円

豊島区南大塚3-10-10 ☎03-987-8621

リユミエール叢書 ● 新刊2冊

リリアン・ギッシュ自伝

鈴木圭介訳

映画とグラフィースと私
たる生涯。自伝の白眉。

名女優の絢爛
3400円

成瀬巳喜男の設計

中古 智
蓮實重彦

美術監督は回想する
とセットの特質。写真60頁。
成瀬映画のロケ
2370円

筑摩書房

〒111 台東区蔵前2-6-4
☎03(5687)2680 (価格は税込)

■最新刊■

日高敏隆エッセイランド

人類はいません

動物のユニークさ、不思議な行動を、
軽妙な筆致で描く。話題満載のシヨ
ト・シヨート集。四六判／一五〇〇円

大村政男著

血液型と性格

血液型と性格の間には、何の関連もな
いことを実証。現代の血液型シンドロ
ームへの警鐘！ 四六判／一九〇〇円

東京・文京
小石川1-3

福村出版

* 定価は税込 *

電話(03)
813-3981

東條内閣総理大臣機密記録

伊藤隆・廣橋真光・片島紀男編

A5判／九八八円(税込)

第1部は、東條内閣時代における極秘扱いの政府日誌、昭和16年開戦から東條政権の崩壊に至る日々の出来事の克明な記録。第2部は、総理大臣秘書官として行動をとった廣橋氏の詳細なメモ。東條の政権担当者としての行動・発言録として第一級の価値をもつ未公開史料、待望の公刊！

東京大学出版会

東京都文京区本郷7-3-1

マルクスと歴史の現実

廣松渉 ソ連東欧が民主化の波に揺れる今、歴史の現実を見つえつつマルクスを捉えなおす。 ●定価2,300円(税込)

ダウニング街日記上

首相チャールズのかたわらで

J・コルワイル 都築忠七ほか訳 首相の秘書官が綴る第2次大戦中の戦局。 ●定価3,000円(税込) 20世紀メモリアル

ドキュメント 臓器移植

M・タウイ 平澤正夫訳 移植ビジネスが栄えるアメリカを取り材し、移植医療の全体像を提示する。 ●定価1,850円(税込)

平凡社

〒102 東京都千代田区三番町5
振替・東京8-26639 ☎03-265-0455

カフカと情報社会

粉川哲夫著

*2500円

「変身」「城」「審判」「アメリカ」等から情報操作と権力の関係を読みとり情報化社会を生き抜く戦略と思想を提示、豊かな民衆文化を掘り起し肥大化した管理社会を切り崩す。20世紀文明に向けた大いなる問いを孕む新カフカ論。

●粉川哲夫著 主体の転換 ●1600円

未来社

東京都文京区小石川3-7
電話(814)5521 振東7-87385

D・G・ロゼッティ

ラングラーD 天国と地獄のはざまに生きたラファエル前派の天才画家11時人の肖像、図版多数。山崎・中条訳 図録100円

西川光二郎小伝

社会主義からの離脱 田中英夫 大連事件の夏に社会主義を離れ、その後30年修養を説いた一明治人の生涯。近代精神史の暗部を探る。 336円

プラド美術館

スカラ/みずす美術館シリーズ3 ギャ、ペラスケスからピカソ、ゲルニカ、まて、スペイン絵画の至宝はじめ三八八点をカラーで収録。 田辺徹訳 図録6円

西田哲学と日本の思想

下村寛太郎著作集12 日本で其の哲学をはじめた西田幾多郎を中心に田辺元、鈴木大拙論等を集成。日本哲学の草創と展開を綴る。 336円

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

良妻賢母論◎女性解放史上の功罪を問う
芳賀 登著 ●2500円

代官所御物書役の日記◎南部藩三戸物語
豊田国夫著 ●1980円

塩の日本史◎雄山閣ブックス②
廣山堯道著 ●2600円

全国石仏を歩く◎ノンビリ石仏めぐりの旅
庚申懇話会編 ●1980円

古墳時代史◎考古学選書⑨
石野博信著 ●3000円

雄山閣

*価格は税込

千代田区富士見2/振替東京3-1685

非売品

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印